
曹徳の奮闘記

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曹徳の奮闘記

【Nコード】

N2622Z

【作者名】

零戦

【あらすじ】

乗用車にひき逃げをされて気がつけば、真・恋姫十無双の曹操の弟として生を受けて、イジメられながら育つが遂に家出をした。

真・恋姫十無双（改）の改訂版になります。

別枠で投稿した方がいいと言われたので、新たに新規投稿をします。

テイルズキャラも出します。

多分ハーレムになります。

第一話（改）

「曹徳、その部屋を掃除しときなさい」

「……………はい」

母親の曹嵩に汚物を見るような目で見られながら俺はグチャグチャになった宴会後の部屋を掃除していく。

「……………あら？曹徳はまた掃除なのかしら？よつぱど掃除が好きなのね」

掃除をしていると貧乳のクルクルドリルが特徴の曹操とお供の夏侯惇と夏侯淵がやってきた。

「……………それが仕事なのですよ」

「あらそう。ならついでに厠も掃除しといてね」

曹操は興味なさそうに言い、夏侯惇も先程の曹嵩同様に汚物を見るような目で俺を見て、二人は何処かに行く。

唯一、夏侯淵は申し訳なさそうに俺に頭を下げて部屋を出た。

「……………さて、片付けるか」

俺は皿などの片付けにかかる。

そろそろ俺の自己紹介をするか。

俺の名は曹徳で親は曹嵩、姉は曹操だ。

え？頭を打ったて？いやこれが冗談と違うからなマジで。

俺は平凡なサラリーマンやった。（ただし、予備自衛官でもある）

そんなある日、仕事が終わって帰宅途中に乗用車にひき逃げをされた。

そして気がつけば、昔の中国ぽい家において姿は赤ん坊だった。

そして母親が曹嵩と知った時は驚いたな。

歴史は好きだったから三国志もある程度は知っていた。（横山三
国志やけど……）

でも、もっと驚いたんが姉が真・恋姫の曹操だった事だな。

ただし、義姉らしい。（歳は曹操と同じ）

俺も詳しい事は分からんからな。実は俺は捨て子で、曹操が生まれてから曹嵩が家の近くを散策していたら俺を見つけて拾ったとか
使用人達が話しているのを盗み聞きして得た情報だから確証は無い。

曹操は正に天才で、十年の一人の逸材らしい。

対する俺は、平凡な大学を出たサラリーマンだったので、知能は普通。

曹操同様に期待していた曹嵩は俺に落胆して、教育の全てを曹操に注がせて俺は雑用の仕事ばかりさせてきた。

「……こんなもんだな……」

俺は綺麗にした部屋にふうと息を吐く。

さて、部屋に帰って読書するか。

俺の部屋は廁の近くにある物置に近い部屋だった。（臭い）

「……………」

俺が読んでいるのは薬草の本だな。

何でそんな本を読んでいるのかというと、もうすぐこの家を出るからだ。

このまま家におったら近いうちに俺は死ぬわほんまに。全身痣だらけだしな。

そのために、野宿する際に食べれるきのみや薬草をこっそりと勉強している。

え？盗賊に襲われる？

まあそうだろうな。でも先日、武器庫の片隅に何故かこの時代には無いはずの日本刀があった。

しかも二本もあって、うち一本は何でか知らないが小太刀。一応、予備自衛官をやっていたからある程度は戦える。

路銀もかなり貯めている。

「ま、それより今は勉強だな……………」

それから、勉強は遅い時間までやった。

そして十日後、俺はとうとうこの家を出る事にした。

正直、曹嵩のイジメには耐えられなかったな。（よく十二年も耐えてたわ。あ、歳は十九ね）

皆が寝静まった夜中、俺はこっそりと塀を乗り越えて着地した。

「さて、追っ手が来る前にちゃっっちゃと逃げるか」

一応、旅の商人の恰好はしてるけどな。（それ用の服は買っている）

「……俺を育ててくれてありがとう。じゃあな、俺をイジメた人達
よ」

俺は生家に御礼を言い、曹嵩達への言葉を言って夜の闇の中に消えた。

翌日、曹徳が消えた事を知った曹嵩は「育ててやった恩を忘れおつたな曹徳ッ！！」と激昂して見つけ次第打ち首にしろと命令をして曹徳の搜索を開始した。

しかし、曹徳は一向に見つかる気配はなかった。

曹操SIDE

「そつ……曹徳は見つからないのね。下がっていいわ春蘭」
「は」

私の言葉に春蘭が下がる。

私は姓は曹、名は操、字は孟徳よ。

曹徳が消えてしまったのはかなりの痛手ね。

義弟である曹徳は昔からよく分からない男だったわ。

でも、同時に私は無能の曹徳は化けると思っていた。

そう直感した私は曹徳をあえて突き放していたわ。

母様はその事に気づいていない。

「まあ、果実は熟したら美味しいからね」

いつかまた会えたら曹徳……貴方は私好みに化けているのかしら？

曹操SIDE終了

夏侯淵SIDE

「……曹徳様……」

私は搜索隊を率いる中、思わず溜め息を吐いた。

曹徳様の行方が分からなくなって既に三日が経過していた。

私が初めて曹徳様にお会いになったのは七つの時だった。

姉者は華琳様に付きつきりだったが、私は何故かよく曹徳様と遊

んでいた。

しかし、曹徳様が華琳様より普通だと知ると途端に私の両親は曹徳様に近づく事を禁じた。

皆は曹徳様を普通だと言つが私はそうは思わない。

曹徳様は華琳様とはまた違う逸材だと私は思う。

曹徳様……ご武運を祈ります。

曹徳のために夏侯淵は曹徳の武運を祈った。

「さて、何処に行こうかな……」

確か董卓は涼州にいたはず……。

それに董卓軍は俺の嫁（笑）の華雄がおったしな。

「よし、涼州に行くか」

俺は涼州に向かった。

第一話(改)(後書き)

御意見や御感想等お待ちしておりますm
——
m

第二話（改）

「……やっと涼州に着いたな……」

流石に徒歩で涼州まで行くのはしんどかったなあ。

「とりあえず、宿に入って疲れを癒したいな」

途中で山賊とか盗賊に出くわして、奴らから浴びた返り血のせいで身体から血の臭いがしてるしな。

「ん？」

何か人だかりがあるな。

「ちよつとすんません」

人だかりの中に入っていくと、董卓軍兵士の募集のおふれが出ていた。（姜族が暴れているため）

「募集は明日の正午までか……」

募集の場所は城か。とりあえず宿で一夜を過ごせるな。

「先に宿へ行こ」

一夜を過ごしてから募集に応募するか。

路銀が少なくなってきたからな。

その後、宿に入って血の臭いとかを洗い落としたりして備えられたベッドに倒れた。

翌日、董卓の居城

「すみません、兵士募集で来たんですけど……」

受付のところまで募集の場所を聞いて行くと、そこは訓練所みたいなところだった。

「む？新しい希望者か？」

訓練所には俺の嫁がおった。

「はい。ところで後ろの人の山は？」

「ん？訓練で鍛えていたところだ」

……………はあ。

「私は董卓軍の将の華雄。後ろで酒を飲んでいるのは同じく将の張
遼だ」

「よろしゅうなあ」

張遼が酒瓶を上にあげる。

「はあ」

「試験は私に一本でも入れたら勝ちだ。これを貸す」

華雄から刃を丸めた剣を渡される。

「あ、ども」

「何か質問はあるか？」

「そうだなあ。俺が勝ったら華雄と張遼は俺の嫁でおK？」

「……………」

あの、黙らないで下さい。

「……………一瞬で片付けてやる……………」

「あ、その言葉はあかんで華雄。それは死亡フラグやねんけど……………」

……………」

「黙れエエエーッ!!」

思わず関西弁が出たが、俺の言葉を遮って華雄が俺に襲い掛かってきた。

俺は迫り来る金剛爆斧こんごうばくこをなんとかギリギリで避けた。(いやマジでギリギリ)

「ほう……よく避けたな」

「そんなヘナチヨコな太刀筋やったら余裕で避けれるわ」

「な、何だとオツ!!」

「(よし、怒ってる怒ってる)」

俺の挑発に華雄は怒り狂い振りかぶって、金剛爆斧を振り下ろした。

俺は太刀筋を見て、なんとか避ける。

「なッ!?!」

「今度はこつちの番だッ!! 虎牙破斬ッ!!」

華雄を下から斬り上げるために、威力は弱めで腹を押し上げるように叩いた。

ぶっちやけテイルズですはい。

せめて何か出来ないかと思って、昔から身体を鍛えながら練習し

ていた。

今のところは虎牙破斬と閃空裂破が出来る。

他は修業中。(てか技もあまり覚えていないしね。この二つだけは何でか覚えていた)

「後一回だッ!!」

今度は斬り下ろしをするために頭を叩いた。

「がッ!!」

華雄は頭を押さえたために受け身が出来ず、胸から地面に叩きつけられた。

「ほら一本取ったぞ？」

「……………ぐっ……………私の負けだ……………」

……………これで勝ちだな。

「ああ。それと嫁の件はあんたを挑発するためだからな」

「何ッ!?!」

「まあ俺としては嫁でもいいんだけどな」

「むむむ……………」

唸るなよ華雄。

「あんさん、中々やるなあ」

……………ウウ……………

「え？きゅ、急に泣いてどないしたんや？」

「いや……………久しぶりに聞く言葉やからついな……………」

久しぶりに関西弁を聞いたわ。

「……………あんたも苦労したんやな」

「まあ、此処に来るまでに山賊や盗賊と死合いをしてたからな」

「成る程な。兵士としては採用や。多分、兵士というより一部隊をやるかもな」

「……………え〜」

「何で、嫌そうな顔すんねん」

「だって、部隊長になったら酒とか飲まれへんやん」

「……………あんたは仲間やツ！！」

何故か張遼に手を握られた。

「ウチも酒が生き甲斐やのに賈クっちは酒を取り上げるねんで……………」

「そらあ苦労したな」

「ほんまやで。あ、そついやまだ名前を聞いてなかったな」

……………忘れてたな。うーん、流石に曹徳はあかんしなあ……………。

……………よし。

「俺の名前は姓は王、名は双だ」

まあ偽名でも大丈夫だろう。(多分)

「ウチは張遼や」

「よろしくな張遼」

「ああ、よろしくな王双」

それにしても、華雄に勝てるとはな。まあ挑発で華雄を怒らしてだけどな。(普通なら負けるしな)

華雄はゲームでも関羽に討たれてるけど、猪突猛進を無くしたら華雄は化けると思うけどな。

「そつや王双。賈クつちに会わへん？」

「何でだ？」

「王双つちやったら一部隊の隊長にいけるからな。酒とか冗談抜き

で

……流石は將軍で事かな？

「いや、普通に路銀を貯めてから旅に行こうかなあと思ってたんだけどな」

「へえ、そうなんか。なら、貯めるまでおっいたらええやんか。客將とかで」

……そんな呑気でいいのか？

「ほらほら、ちやっちやと行くで」

「わ、分かったから押すなよ張遼」

俺は張遼に押される感じで賣クの場所に向かった。

第二話(改)(後書き)

御意見や御感想等お待ちしておりますm
——
m

第三話（改）

「コイツを一部隊長に？却下よ」

「……ほらな」

「何でや賣クつち」

張遼に連れられて賣クの元に来たけど、あえなく却下となった。

「いきなりアタシのところに来たと思えば、ただの一般兵士を一部隊長にしるって……あんたまた酒を飲んでるんじゃないでしょうね？」

「酒は飲んでないわ賣クつちッ！！な、ならウチの部隊に入れてええやる？」

「……それならいいわ」

「流石賣クつちや」

そらあ、張遼の部隊に入れるんなら問題はないからな。

「ほんじゃあな賣クつち。ほら王双も行くで」

「分かった分かった」

俺は引つ張られながら部屋を出た。

「……一体、何なのかしら？」

一人だけになった部屋で賣クはそう呟いた。

「それじゃあウチの副官をやっつてな」

「仕事は俺に任して、自分は酒を飲むんか？」

「ギクギクッ！！（。・。）」

そら分かるって……。

「で、副官の仕事は何をするんや？」

「ま、まあウチの補佐役やな。主に書類が多いけどな」

「ならさっさとして酒飲もうや」

「それもそうやな」

こうして、ただの一般兵士の募集に来ただけなのに、何故か張遼の副官をやらされる事になった。（ただ、張遼の副官がいないのは前任が退役して後釜が決まるまで交代制で張遼隊の奴らがしていたらしい）

数日後、俺は何となくやけど副官の仕事を覚えてきた。

まあ張遼がよく逃げ出すのを防いでるけどな。(むしろ、張遼隊の奴らからは張遼を防いでる事に感謝しているみたい)

「そつや王双つち。明日は戦やで」

「ああ。だからその準備をしているからな」

明日から、暴れている姜族を鎮めるために出発する。

「どうや？初出陣の前祝いに飲むか？」

「阿呆か。酔っ払ってたらやられるだろうが……」

「ウチはそんな大丈夫やけど……」

「それは張遼だけだよ」

俺は溜め息を吐いた。

翌日、張遼隊と華雄隊五千名は出発した。

俺には人生初めての大规模な戦いだな。

涼州に来るまでは盗賊や山賊と戦ってきたけど、今回は違うな。

「何や王双っち、緊張しとんのか？」

張遼が聞いてきた。

「ああ。人生初めての大規模な戦いだからな」

「そうなんか。まあ馴れたら後は普通やで」

「そうか……………」

そして、俺達は戦場に到着した。

「相手は姜族やッ！！油断すんなよッ！！」

「全軍突撃イイーーーーッ！！」

『ウワアアアアアアーーーーッ！！！！』

一斉に兵士達が姜族に駆け出した。

「行くで王双っちッ！！」

「あ、ああ」

まだ乗馬の練習は三日しかしてないけど、何とか馬を操って俺も

戦場に突撃した。

ザシュツッ!!

「ギャアアアッ!!」

兵士が腹を剣で切り裂かれ、腸が露出する。

また、ある兵士は首を斬られて、斬られた箇所から血が噴水のよ
うに噴き出す。

四肢のどれかを斬られて倒れる兵士や姜族……………。

……………これが……………。

「……………これが戦場なのか……………」

現代だと銃撃戦とか多いけど、これは記憶に残るな。

それでも吐き気はしない。

理由としては、涼州に来るまでに数回、山賊や盗賊達と戦って死
体を何回も見てるからだろうな。

しつこい説明やけど気にするな。

「ウオオリヤアアッ!!」

槍を持った姜族の兵士がボウツとしていた俺に突撃してくる。

「ハアツ!!」

ザシユツ!!

俺は槍を切つて、兵士の首を斬る。

血が噴き出して俺に降り懸かる。

「ウオオリヤアアツ!!」

また来た。

「ウオオオオツ!!」

俺は斬られないように避けて、相手の首や胸を刺して命を奪っていく。

「ん？」

ふと人だかりを見ると、張遼が姜族の兵士に囲まれていた。

「ちいッ!!」

俺は人だかりに走った。

俺の接近に気づいた姜族の兵士が槍や剣を構えた。

「どけえええッ!!」

俺は叫んで兵士を斬っていく。

「王双つちツ!?!」

「無事か張遼ツ!?!」

何とか囲みを斬っていくと、切り傷がありながらも孤軍奮闘している張遼がいた。

「ありがとな王双つち。ハアアアツ!?!」

張遼が俺の突撃に怯んだ姜族の兵士達の間をついて切り捨てていく。

「ヒイヒイツ!?!」

遂に、姜族の兵士達は囲みを解いて逃げ出していく。

「……助かったで王双つち……」

「無事でよかったよ張遼……」

まあ將軍が死んだら部隊は終わるからな。

………ん?

「張遼ツ!?!」

俺は近くの岩に何か動くのを見つけた瞬間、俺は張遼を抱いた。

「お、王双つちツ!?!」

張遼がいきなりの事で顔を赤くしているが、知らん。

ドストスツ!!

ウグツ……軽い衝撃が来たな。

「……華雄ツ!!お前の近くの岩に伏兵やツ!!」

「分かったツ!!」

岩の近くにいた華雄に向かって叫び、華雄は弓を持った伏兵を切り捨てた。

「……これで大丈夫やな……」

「ツ!?王双つち、怪我……」

張遼が俺の背中に打ちつけられた矢を見た。

「医師は何処やアアア……ツ!!」

張遼の叫び声を聞きながら、俺は意識を失った。

第三話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第四話（改）

「……………う……………」

俺は目を開けると、そこは天幕の中にいた。

「……………知らない天井や……………」

天幕やねんけど、俺自身は俯せのような状態（コナン映画で負傷した阿笠博士みたいな格好）で寝ていたんやな。それとここは天井や。これ重要な。

「……………ん？」

左手が何か掴まれているな。

「……………張遼……………」

張遼が俺の左手を握りながら眠っていた。

「おやおや。目が覚めたようじゃな」

医師が入ってきた。

「ホッホッホ。お熱いのう」

「い、いやこれは……」

張遼から手を離そうにもガツチリと掴まれている。

「張遼將軍はお主の手をずっと握っておったわい。先程まで華雄將軍もいたが戦の後処理をしておる」

「……戦はどうなったんすか？」

「意外にも姜族は強かったが、辛勝と言ったところかのう。死傷者も約三千名を数えておるからしばらく滞在してから帰還するみたいじゃ」

激戦と言ったところやるか。

「……ん……」

あ、張遼が目を覚ました。

「……王双っちッ!!」

「うわッ!?!」

張遼が俺が起きてるのを見ると、いきなり抱き着いてきた。

「よかった……ほんまよかったわ王双っち……」

「……どういっ事や?」

俺は思わず医師に助けを求めた。

「お主が当たった矢には毒が塗られていたんじゃないよ」

「……………マジ？」

「本気と書いてマジじゃ」

まさか毒矢とはな……………。

「ほんまに心配してんからな」

よく見ると、張遼の目元に涙の跡があった。

「……………悪いな張遼……………」

「やっと後処理が終わった。張遼、王双は目を……………王双ッ！！」

天幕に華雄が入ってきて、起きてる俺に驚く。

「目を覚ましたんだな」

「ああ。大分迷惑をかけたみたいだな」

「全くだ。張遼隊の業務もやらされたんだ」

「それはスマン……………」

「それに貴様が死んだら、また貴様と戦えないからな」

……それが狙いかよ。

「それはちゃんとしたるわ」

「うむ。約束だ」

……何か華雄の死亡フラグが立ったような気が……。

「そろそろ診察したいからいいかの？」

「医師の言葉に張遼が慌てて俺から離れた。」

それから三日間は部隊の休息を兼ねて、付近の村々の治安維持をして帰還した。

それから数日後、俺は董卓軍の兵士を辞めた。

「何で辞めんねん王双っちッ!!」

賈クに辞表を提出して部屋の整理をしていたら張遼と華雄が入り込んだ。

「いやだって……元々軍に入ったんは路銀を貯める事やったからさ。二人かて知ってるやろ」

「そ、そりゃあそつちけど……」

「しかしな……」

何か釈然としない二人。

「大丈夫や。二人に何かあったら直ぐに飛んで帰ってくるな」

「……」

二人は溜め息を吐いた。

「分かった分かった。んじゃあウチら危なかったら助けにきいや？」

「ああ。そつちや二人に真名を預けるわ」

「……いいのか？」

「ええよええよ。俺の真名は長門や」

本当は真名を貰われへんかったけど、長門は前世の名前やったからな。

「ウチの真名は霞や」

「私の真名は桜花だ」

え？華雄に真名つてあつたんか？

「私が真名を預ける条件は私より強い奴なんだ。一度だけとはいえ、王双……長門は私を倒したんだ。だから真名を預ける」

「そうやったんか……………」。

「ああ。預からせてもらうわ桜花、霞」

「次会ったら飲むで」

「それもええな」

そして、霞と桜花と分かれて涼州を後にした。

「さて、次は何処に行こうかな……………」

巨乳が多い呉に行こうか。確か周瑜は病気があったな。

「あれはどうやって治すか……………」

「ま、今考えて仕方ないな。」

「とりあえず、行き先は呉に決定だな」

「……………はあ……………しんど……………」

俺は今、馬に乗っていた。

流石に馬無しでは足が持たないから途中の町で、馬商人から馬を一頭購入した。

「馬やと楽やわあ……………」

ビュンビュンッ！

ドストストッ！

「ヒビーンッ！？」

「うわッ！？」

な、何やッ！？馬がいきなり暴れだした……………て、尻のところに矢が二本やて？

「ヒビーンッ！！」

「うわッ！？」

俺は投げ出されたけど、咄嗟に受け身をとって傷はなかった。

「へっへっへ……………」

すると、草むらから十数人の山賊か盗賊と思わしき奴らが現れて、俺の周りを囲んだ。

「兄ちゃんよ。有り金と服は置いてってもらおうか？」

「……フッフッフ。だが断るッ!!」

「こらそこ、ジヨジヨとか言っな。」

「なら死んでから奪うまでよッ!!」

盗賊達はそう言っ俺に襲い掛かる。

「お前らが死ぬッ!!閃空裂破ッ!!」

『ギヤアアアーーッ!!』

一斉に襲い掛かるうとしていた盗賊を閃空裂破で倒す。

「な、何だコイツはッ!!」

「お頭を呼んでこいッ!!」

「まだ終わつとらんでッ!!虎牙破斬ッ!!」

「グエッ!!」

俺は虎牙破斬で盗賊を倒し、囲まれたら閃空裂破で脱出する。

「何をやっているッ!!」

その時、正面に大金棒を持った女性が現れた。

……あれって確か……。

「私は魏延、字は文長だッ！！潔く死ねッ！！」

魏延は俺にそう言った。

第四話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第五話（改）（前書き）

若干無理矢理感と歴史改変です。

テイルズキャラは袁術ルートに入ってから出そうと思います。
勿論ヒロインキャラですね（キリ）・・・（

第五話（改）

「私は魏延。字は文長だあだなッ！！潔く死ぬつッ！！」

魏延はそう言って跳躍して鈍碎骨どんさいこつで俺を叩こうとするが俺は避ける。

ドゴオオンッ！！

衝撃で近くあった岩が砕けた。

「次行くぞッ！！」

「うわッ!?!」

ドゴオオンッ！！

何とか、魏延の攻撃を避けていくけどいずれはやられそうだな。

……………なら……………。

「突撃しかないッ！！」

「フ、潔く死ぬ気になったかッ！！」

魏延が鈍砕骨を振り下ろそうとする。

「だから俺は死なんツ！！虎牙破斬ツ！！」

「グウウツ！！」

ああ、勿論峰打ちだからな。（原作キャラだから死なせたらあかんからな）

「まだまだアツ！！」

俺は連続で虎牙破斬を叩き込んでいく。

「……グフツ！！」

そして遂に魏延が倒れた。

「お、お頭がやられたー！！」

「に、逃げるオー！！」

生き残っていた盗賊達は一目散に山に逃げていった。

「……はあ……」

俺は溜め息を吐いて、魏延を背負って近くの小川に連れていった。

「……………」

あ、魏延が目を覚ましたな。

「お？傷の具合はどうだ？」

「き、貴様は…………グウウツ！！」

魏延が起き上がろうとするけど、傷の痛みで倒れた。

「無理して起き上がろうとするからだよ」

俺は魏延の身体に触れる。

「…………や…………あ…………」

ん？魏延が急に顔を真っ赤にしたな。

「…………やめろ…………私の…………肌は…………敏感なんだ…………」

ああ、確かゲームでもそうやったな。

…………でもそれは無視だな。何故なら俺の目の前には魏延のオツパイがあるからな。てかマジパネえ…………。

「……………」

魏延は俺の視線が何処にいつているのに気づいたのか、一気に顔を青ざめながら強く左右に首を振る。…………しかも上目遣いときたよ。

「……………いいのか？」

「いいよ。それに……………責任取れよ。私に……………あんなのさせて……………」

「あ、ああ……………」

「いやあ、魏延のオツパイは柔らかかったからなあ。

「とまあ、魏延を仲間？にする事が出来た。

「それでこれから何処に行くんだ？」

「今のところは孫呉でも見に行こうかなと思ってるよ」

「ほう孫呉か……………」

「確か孫堅が黄祖に討たれるからな。

「それを阻止してみるか。」

「んじゃ、孫呉へ出発やな」

というわけで孫呉の長沙に着いたわけなんだけど……。

「兵士として参加するのか？」

「いや、軍団の後ろに隠れながら付いていくから」

「何でだ？」

……どう説明しよか……苦し紛れだけどやるか。

「いや実はな、焔耶（真名は許してくれた）と出会う前に管輅とかいう占い師に言われたんだ。『孫堅を守らねば貴様はまともな人生を歩めない』てな」

「……嘘っぱいな……」

「俺も最初はそう思った。でも管輅は雷や雨で増水した川が氾濫する事を予言して見事に当てたからな。んで俺は信じてみる事にしたというわけ」

「成る程なあ……」

俺と焔耶は長沙の町並みを歩く。

「とりあえず、宿を取って孫堅軍が動くまで待つしかないな」

それから三日後、孫堅軍が襄陽へ向かったのを聞いて俺と焔耶は孫堅軍を追った。

「…………あれが襄陽か……………」

「それであれが孫堅軍と……………」

俺と焰耶は近くの本で隠れていた。

「今のところは何もなしな」

「ん？おい、襄陽の門が開いたぞ」

確かに門が開いていた。

「孫堅軍に行くぞ」

「分かった」

俺と焰耶は孫堅軍の陣営に向かった。

第五話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第六話（改）（前書き）

今回はご都合が出ます。

マイソロシリーズでアイテムを取る箱……。

第六話（改）

「……………なんだかなあ……………」

「どうしたんだ長門？」

不審に思った俺に焰耶が声をかけてくる。

「あの箱の中身を見てから急に態度が怪しいぞ」

「いや大丈夫大丈夫」

「ならいいが……………」

実は、孫堅軍を追っている最中にとある箱を見つけた。

その箱がなあ……………ティルズのマイソロシリーズに出てくる道具箱にそっくりだったんだよなあ。

んで、箱を開けたら一冊の本があった。

本の中身はファーストエイドやリカバーなどの呪文の仕方が書いてあったし、何でか知らないが『アレ』の作り方も書いてあった。

何で恋姫の世界にティルズのがあったのかは不明だけどな。

「ん？」

何か孫堅軍が騒がしいな。

あ、単騎で誰かが山の方に向かったな。

「多分、あれは孫堅だろうな」

「……普通、大将は単騎で飛び出すか？」

まあ孫策の親だからな。

「とにかく追うとしよう」

「ああ」

俺と焰耶は孫堅を追った。

「ちいッ！！畏だったわねッ！！」

私はそう叫びながら黄祖の伏兵を斬り倒していく。

「もらったッ！！」

「なッ！？」

伏兵に隠れていた黄祖が私に斬り掛かる。

咄嗟に私は左腕で頭を庇う。

ザシュツ！！

「グアアツ！！」

……痛い……眼を開けると、私の左腕は斬られていて血が噴き出し、左腕は地面に落ちていた。

「ゲヒヤヒヤヒヤツ！！これで終わりだな孫堅ツ！！死ねえツ！！」

黄祖が私に斬り掛かろうとした。

「そうはさせるかよツ！！」

ザシュツ！！

「ゲバアツ！！」

その時、黄祖の首が吹き飛んだ。

「間に合ったか」

まだ死んでいなかった孫堅を見て安堵する。

「焰耶ッ！！思いつきり暴れるッ！！」

「初めからそのつもりだッ！！」

焰耶が伏兵を散らしていく。

「大丈夫か孫堅？」

「あ、ああ。お前達は？」

「なに、ただの旅人や」

俺は切断された左腕に包帯を巻く。

「ウッ！！」

「少し我慢してな……ファーストエイド」

切断された左腕（二の腕辺り）にファーストエイドをかけて血を止める。

「血が……」

「これで大丈夫だ。左腕を斬られた以外はな」

「……………それは仕方ない。戦場での傷なんだ」

孫堅が笑う。

てか本当に孫策を大人にしたバージョンだな。

「堅殿オーーーーッ!!」

「あ、祭の声だ……」

……さて、俺達はそろそろずらかるか。

「焰耶。そっちは？」

「あらかた片付けたぞ」

「了解。それじゃあな孫堅」

俺と焰耶は馬に乗る。

「あ、待てッ!!お前の名前は何だ？」

「姓は王。名は双や」

「……王双。助けてくれてありがとう」

孫堅は俺に頭を下げた。

「なに、気にするな。んじゃあな」

俺と焰耶はそのまま立ち去った。

「堅殿ツ！！無事であつたか……と、それは……」

「祭、済まなかつたな。左腕を黄祖に取られた」

「いや、堅殿が生きているだけでもよかつた」

「……………王双……………」

私は二人が立ち去つた後を見ながら祭達と陣営に戻つた。

「さあて、次は何処に行こか」

「私は何処でもいいぞ」

馬に乗りながら考える。

……………ん？確か……………。

「確か南陽大守は袁術だつたよな？」

「ああそつたぞ」

「なら南陽に行つて、袁術の元で客将でもするか」

「何故だ？」

「ん？だつて袁家だと給金は高いだろ？」

「……………納得した……………」

焰耶は苦笑した。

そして俺達は南陽へ向かった。

「あれが南陽か……………」

あれから一週間の時が流れたけど、何とか路銀が底をつく前に到着出来たな。

……………ん？

「何だあれは？」

「どれだ？」

俺達から五百メートル程離れたところに百名程度の軍勢と少女と女性がいた。

「うゝん……………あれはッ!？」

「お、おい長門ッ!!」

俺は少女と女性を漸く思い出して馬を軍勢に走らせた。

?? SIDE

……これは失敗しましたね。まさか文官の韓胤までもが裏切ってたなんて……。こんな事になるなら素直に零さんの言うことを聞いとけばよかったですね。

「さあどうしますか張勳殿？我等に従うと宣言すれば愛しい袁術様を返しますよ。くっくっく……」

武将の雷薄が私に尋ねてくる。

「……………」

「おやおやだんまりですか？なら、袁術様は少し痛い目に会わないといけないですね」

ニヤニヤしながら同じく武将の楊奉が美羽様に突き付けている剣を喉元に突き付ける。

少し刃が喉に当たったのか血がツウっと流れ出ている。

「な、七乃お……………」

「御嬢様ッ!!」

くッ……やはりここは従うしかないですね。

私はそう思い、構えていた剣を地面に突き刺そうとした時、御嬢様に剣を突き付けていた楊奉の首が飛んだ。

そしていつの間にか妙な刀剣を持った私くらいの歳の男がいた。

張勳SIDE終了

第六話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第七話（改）（前書き）

総合評価が三日で606ポイント……。マジでありがとつこぞいま
すm() m

今回は（仮）でもあった美羽と七乃との出会いです。美羽が馬鹿じ
やないので。

第一話は改訂しました。

第七話（改）

長門SIDE

おゝ、やっぱり首って人体の中で一番弱いて本当だな。

まあそれは置いていて。

……やっぱり少女と女性は袁術と張勳だったか。

張勳は好きなキャラやから感動もんだな。

「き、貴様何者だツ?!」

ちい、人が感動してんのにうぜってえ奴らだな。

「おめえらに名乗ったて意味ねーだろ。どーせ今から死ぬんだしな」

そついうと俺は袁術を抱え、張勳の元に行く。

「御嬢様ツ!!」

「七乃おゝ、恐かったのじゃ〜」

二人が抱きしめあう。

「フン。どうやら貴様はこの場を見ていないのか？」

文官っぽい男が右腕を上げると三十くらいの兵が俺に槍を向ける。

「どおううりやあああー！ツ！！！」

そこへ焰耶が軍勢の後ろから攻撃を仕掛ける。

「な、何だツ！？」

「後方からまた単騎での攻撃ですツ！！」

「な、何イツ！？」

「おいこら、よそ見すんなよツ！！」

「なツ！？」

一瞬の隙をついて、文官の首をもぎ取って血の雨が降る。

「焰耶ツ！！残りは兵士だけやツ！！叩き潰せツ！！」

「おうツ！！」

そして、少女と女性が見守る中、百名程度の軍勢は壊滅状態になる。

そこへ、南陽から砂埃と共に新たな軍勢が来た。

「あ、零じゃッ！！」

袁術が『紀』と書かれた牙門旗を見てはしゃいでいる。

「『紀』？……………ああ紀霊か」

「……ッ！？何故紀霊さんを知っているんですかッ！？」

七乃がつかみ掛かるように俺に問う。

「まあ三国志を見たからな」

「三国志？」

「後で教えるよ」

「美羽様ッ！！七乃ッ！！無事かッ！！」

現れた部隊から一人の女性が叫びながらこちらに来た。

「おおッ！！二人とも無事であったか……………ん？お主らは誰だ？」

黄蓋のようなボンキュボンのお姉さんが話し掛けてくる。

「零、この二人は妾達を救った命の恩人じゃ」

「おおそうでしたか。僕は紀霊。美羽殿に仕えておる」

「俺は姓は王。名は双です」

「そうじゃ。妾達も名乗ってはおらんかったのう。妾は袁術、真名は美羽じゃ。南陽大守をしておる」

「お、お嬢様ッ！？真名も言つのですかッ！！」

張勳が驚いてる。

「何を言つのじゃ七乃。王双は妾達を助けてくれた。それに何やら王双は面白そうじゃからのう」

「お、お嬢様」

……………袁術てこんな性格だったか？

「それなら俺も真名は長門だ」

「私は魏延。真名は焰耶だ」

「おおそうか。ほら七乃も言つのじゃ」

「……………お嬢様がそこまで言つのであれば。私は張勳、真名は七乃です」

「ところで長門と焰耶。何故南陽に？」

「ん？いやあ、そろそろ路銀も底を尽きそうだったから美羽の元で客将でもしようかと思ってたんだよ」

「成る程のう。ならやってもいいが、その代わりに条件があるのじや」

「条件？」

「うむ。まあその事は城に戻って言うのじや」

「先程は真名を言えなかったな。儂の真名は零じや。受けとってくれ」

「ありがとうな零。俺は長門だ」

「こちらこそ。私は焰耶だ」

「さて、真名の交換も終わったところで条件をなんじやが……妾達と鼠退治をしてほしいのじや」

「鼠退治……だと？」

「お、お嬢様。まさか……」

「そのまさかじや。妾は今が好機とみておる」

「……どういふ事だ？」

俺は七乃に尋ねる。

「あ、はい。御覧の通り、お嬢様はまだ幼少のため政治の全てを理解しきれません。そこへ自分の腹を満たす事しか考えてない文官の韓胤や武将の雷薄達がお嬢様を人質にして我々を脅しているのです」

昔も今と変わらんなあ……。

「分かった。そういう鼠退治なら任せろや」

七乃は俺の言葉に涙を流した。

「ありがとうございます長門さん……」

「てかさ、美羽に忠誠を誓ってるのは七乃と零だけなのか？」

「……残念じゃが、俺と七乃以外は美羽様を暗殺するような輩だけじゃ」

零が俺に詳しく話す。

「そうか……。ならば七乃、一か八かの賭けをしてみないか？」

「どんな賭けですか？」

俺は七乃に耳打ちをする。

「……まさに一か八かですね。ですがやってみる価値はありますね。やってみましょーッ!ー!」

七乃は零と美羽に詳しく説明する。

二人も意気揚々として準備に取り掛かった。

「てか展開早くね？」

それを言うな。by作者

翌日、李豊、楊弘以外の文官、武官が緊急召集された。

内容は『袁術が病で倒れた。もって後、数日の命。袁術は後継者を決める』と使者が伝え、自分の腹を満たす事しか考えない武官や文官達はウキウキしながら集まった。

だが、それが彼等の命取りとなった。

第七話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第八話（改）（前書き）

（仮）からの使いまわしとか言わないで（滝汗）

小説がいつの間にか日間ランキング第四位………何があったんや…
…。

それと、長門の名前である織田信長を変えようと思います。

一応、候補に上がっているのは王双、張翼、飛燕、関索などです。
（個人的には王双か飛燕）

王平と関平は使うキャラがいますので。

飛燕は旧陸軍三式戦闘機『飛燕』から取りました。

第八話（改）

「袁術様。ご気分は如何ですか？」

文官の舒邵しゅうせうが病のフリをしている美羽みうに尋ねる。（てかフリに気づいていない）

「うむ……周りが霞んでおる。どうやら妾はもう駄目なようじゃ」

「そんな事をおっしゃらないで下さい殿」

武将の梁綱りやうこうが美羽を励ます。

「いや、妾の身体は妾が一番分かるのじゃ。だから死ぬ前にお主に頼みがあるのじゃ」

「何ですか？何でもおっしゃって下さい」

「なら……全員死んでくれ」

『……はいっ』

美羽の言葉に文官と武官の目が点になる。

「じゃからここに居る全員死んでくれと言っておるのじゃ」

美羽が寝たまま右手を上げるとボタンッ！！と扉が開き、武装した兵士が出て来た。

「ーーーーッ！！こ、これはどういふ事ですか殿ッ！！」

舒邵が美羽に詰め寄る。

「てめえらの企みは全てばれてんだよ」

美羽の寝ているベッドの近くの柱から俺達が出た。

「舒邵以下腐った文官、武官を全員粛清するのじゃッ！！」

美羽の言葉に兵士達が舒邵達に矢を向けて放った。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

ドスッ！！ザシャッ！！グサッ！！

「ギヤアッ！！」

「ぶげらッ！！」

「あべしッ！！」

兵士達から放たれる矢に武官、文官達が次々と力尽きていく。

「くそお……………こうなれば袁術もろとも道連れだッ！！」

梁綱は隠し持っていた短剣を出して美羽に斬りつけようとした。

「美羽様ッ！！」

七乃と零が叫んだ。

「そつは問屋がおるすかッ！！」

俺は美羽が斬りつけられる刹那に美羽を庇う。

ザシュッ！！

「グッ！！」

いてーな糞がッ！！

俺は美羽を七乃達に投げた。

「妾が飛んでる」

解説ご苦労さんッ！！

「美羽様、大丈夫ですかッ！！」

「妾は大丈夫じゃ。しかし、長門が……」

「おのれ小僧がッ！！」

梁綱が短剣で俺に斬りかかる。

俺は何とか避けて、短剣を持つ右手を斬った。

ザシユツ!!

「ぐツ!!」

ポトツと、右手が落ちて斬られた右腕からは血が噴き出している。

「今度はこっちの番やツ!!」

「ガツ!!」

虎牙破斬で梁綱を斬り上げて斬り下ろす。

「まだまだアツ!!何度でもするぞツ!!」

「ガツ!!ぷえツ!!」

連続して虎牙破斬を繰り返していくと、梁綱は大きな肉片となった。

「ふう……………」

俺は息を吐く。

「長門オツ!!」

ドオンツ!!

「ブホウツ!？」

美羽が俺にタツクルをかましてきた。

「長門、大丈夫かや？痛いところはないのか？」

美羽が大阪のおばちゃんのようにマシンガントークをかます。

「美羽、俺は大丈夫や。少し右腕が斬られたけどな」

二の腕が綺麗に斬られているが右腕が無くなるとかそういうのではないな。

「ふむ、すぐに医師に見せたほうがよかるう。誰か医師を呼んでこいッ！！」

零が俺の二の腕を見て、そう判断する。

「（ヒールとかファーストエイドを使えばええねんけどまあええか）」

「とりあえずは反乱を抑える事が出来ましたが、当分の間、文官や武官の数が足りませんね」

七乃がハアと溜め息をついた。

「まあ俺も両方回るからガンバ」

「長門さんには感謝しきれませんね。この策も長門さんが考えましたしね」

無茶苦茶今さらやけど、この作戦を思いついたのは俺。

てかあんなに上手くいくとは思わなかったけどな。 f ^ | ^ ;

「何はともあれ長門と焰耶のおかげなのじゃ。長門、妾は心から我が袁家に来た事を感謝するのじゃ」

美羽が頭を下げた。

むろん、零や七乃、兵士達もだ。

「こちらこそよろしくな美羽」

俺は美羽と握手した。

「……私……活躍してなかったな……」

……頑張れ焰耶。

俺は焰耶にそう言える事しか言えなかった。

第八話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第九話（改）（前書き）

とりあえず、長門の名前は王双で行きます。

最後にテイルズキャラ出ます。

第九話（改）

「ん〜。よう寝たなあ」

俺は大きく背伸びをした。

昨日はようけあったわほんまに。血の臭いとかしてへんやろな？

「それにしても、ゲームとは大分美羽達の性格が違うな……」

昨日会った美羽、七乃、零の三人。

「零は恋姫におらんかったけど、雰囲気は黄蓋やな」

俺はそう言いつつ私服に着替える。

まあ右腕はまだ包帯巻いてるから着にくいけどな……。

「おう美羽、七乃お早う」

食堂に向かう最中に美羽と七乃に出くわした。

「お早うなのじゃ長門」

「お早うございます長門さん」

二人が俺に挨拶をしてくる。

「今から朝メシか？」

「はい、長門さんも食べますか？」

「おう」

俺達は朝メシを食べた。

「今日は七乃達、文官を手伝うわ」

「なんじゃと？長門、儂のところに来い」

零が不満げに顔を膨らます。

「……やべ……可愛ええ……」。

「そうしたいけど、まだ腕も完治してないしな。代わりに焰耶と頼むわ」

「むう、仕方ないのう。焰耶と鍛練でもするかの」

零は諦めて雑刀を持って訓練所に行った。

「長門さん、本当に袁術軍に入ってくれるんですか？」

「そつやけど、何で？」

「いえ、普通なら孫堅さんとかもつと力が大きいところに行けると思っているので……」

「一応、董卓のところで張遼の副官をやったけどな。まあ少しの間やけど」

「何で董卓さんのところを辞めたのですか？」

「ん、もうちよい色んな国を見ていたかったのが本音やな」

「へえそつなんですか。なら最近、曹操とかいう人も中々いいみたいですよ」

「あんな百合なところに行きたくない」

あの阿呆は、俺がまだ屋敷にいてた時から色んな女とやってたからな。

最悪、四六時中は曹操の部屋から喘ぎ声が途絶えなかった。（まあ夏侯惇の声が多かったけどな）

「何か曹操さんとあったんですか？」

「いや何も無いな」

「……………分かりました」

七乃が何か察したのか頷いた。

「ああそれで美羽の軍に入った理由だけど、何か美羽が可哀相でなついで助けたくなつたんだ。それに美羽の将来性も期待してるからな。なんたつて、美羽を支える可愛い大將軍がいるからな」

「もう、からかわないで下さいよ長門さん」

七乃が顔を赤らめる。

「いやまあ事実なただけだね。」

「まずは、年貢の状況やな。七乃、年貢の取り分はどうなってるんや?」

「年貢を10としますと、半分ずつの五公五民とじていますよ」

「……………いや多分違うな。多分、舒邵達が増税しと思うから調べてみたら?」

七乃も頷き、部下に調べさせた。

そして一刻程で報告がきた。

「……………八公二民で何て事をしていたんですかあの人は?」

思わず七乃が机を叩いた。

「七乃は気づかなかったんか？」

「舒邵達が何かをしていたのは知っていましたけど、美羽様を守るので精一杯でしたので……」

「まあそれはしゃーないな。とりあえず年貢の取り分は四公六民に変更な」

北条早雲のパクリやね。それを詳しく知りたかったらウイキで。

「五公五民ではなくていいんですか？」

「民の信頼を無くしたら国は滅びるからな」

「確かにそうですね」

七乃が頷く。

「食糧は倉庫に有り余つとるやろ？食糧事情が苦しい農民に分け与えないとな」

「そうですね」

そうしてあれやこれやで溜まっている書簡（でええんか？）が無くなっていく。

あ、そうや。

「七乃、屯田兵を作ろうや」

「屯田兵……ですか？聞いた事ない言葉ですけど……」

「まあそうやるな。俺が考えたからな。屯田兵てのは普段は農民と同じように田畑を作り、戦時は兵士として働くというのや。もしくは浮浪者や牢に入った犯罪者を使ってするとかな」

「成る程……それはいいですね」

明治時代の日本の北海道で行われていた屯田兵の事やけど、間違ってたら作者まで言ってたな。

「後は金銭面やけど、兵士の鎧は廃止やな」

「廃止で長門さん……（…）」

「別に裸で戦えちゃうで？俺も鎧を着て戦った事はあるけど、重くて動きにくいからな。一応、鎧も考えてるんや」

「どんな鎧ですか？」

「機動力を重視した鎧やな」

「機動力重視の鎧ですか？」

「ああ、戦てのは時間との勝負でもあるからな」

まあこれは俺の考えやけどな。

とまあそんなこんなでいつの間にか夕方近くになっていた。

「長門。いるかの？」

「どつしたんや零？」

食堂にメシでも食べに行こうとしたら部屋に零が入ってきた。

「これから舒邵達の屋敷を家宅捜査をするんじゃがお主も来るかの？」

「ああ行くわ」

多分、まだ不正していたのがありそうやな。

「じゃあ私はお嬢様と夕飯を食べますので」

「おう」

舒邵宅

「徹底的に調べるんだッ！！」

零が兵士達に捜査の指示を出している。

「王双様。こちらの倉を……………」

兵士が俺に駆け寄ってきた。

「倉？」

「は。その…………… 奴隷がおりまして……………」

兵士が答えにくそうに言う。

「…………… 分かった。行くわ」

「すみません」

「いやええよ」

「これがその倉か……………」

中に入ると、首を鎖で巻かれ、ほぼ裸の女性達が多数いた。

「直ぐに鍵を探せ。お前らは女性達を保護や。何か布でも身体を隠せる物をかけてやるんや」

『はッ！！』

俺の命令に兵士達が動く。

「ん？」

ふと、倉の奥に視線を向けると二人の女性がいた。

「おい。大丈夫…夫……」

……嘘やろ……。

その二人は本来ならこの世界にいないはずだった。

一人は帽子を被って裸やけどあの顔はかなり見覚えがある。

もう一人も裸やけど、ピンク色の髪をしてポニーテールに近い髪型をして見覚えがある、ゲームでな。

「……クロエ・ヴァレンス、カノン・グラスバレー……」

………何でテイルズの二人がこの世界におんねん。(滝汗)

第九話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十話（改）（前書き）

さてさて、クロエとカノンノの登場です。

屯田兵は明治時代の日本で行われていた屯田兵の事を指しています。

ややこしくてすみませんm(_____)m

F X……F 35……仕方ないと言えば仕方ないかなぁ。自分はタイフーンがよかったけど。

第十話（改）

「……ちょっと失礼するよ。貴女達の名前はもしかしてクロエ・ヴァレンスとカノンノ・グラスバレーかな？」

俺は二人に近づき、出来るだけ優しく聞いた。

「ッ!？」

あ、二人が驚いたという事は……。

「本物かよ……」

俺は深い溜め息を吐いた。

……神様よ、なんつう事してくれるんだよ……。

「……貴様は、私達を知っているのか？」

クロエが驚きながらも俺に聞いてきた。

「まあ……一応はな」

「あ、あのッ!! 此処は一体何処なんですかッ!!」

「そうだ、ヴェラトローパで変な機械が作動して気がついたら此処にいたんだッ！！」

「ちょ、一気に喋るなッ！！てかその前に何か着ろッ！！」

「「え……あ……」」

二人は自分の服装を見て顔を赤くした。

二人の服装はところどころ破れていたりしてるんやな。

「とりあえず此处で話すより城に戻って聞くから」

二人に服を着させて、零達と城に戻った。

「さて、話してもらおうか」

俺は二人を部屋に入れた。

「ああ。私とカノンノはルミナシアという世界で空を駆ける船、バシエルティア号を拠点に活動するギルド『アドリビトム』のメンバーだ」

……成る程、マイソロ3か。

「それでいつものように、ヴェラトローパでクエストをしていたんだ」

「私とクロエ、ロツタ、しいなでロックスもいたんだ」

「私がメデューサーパーを吹き飛ばしたら一部が破壊してしまっ
たんだ。そしたら急に他の機械が動き出して視界が真っ白になって
……………」

「……………そして気がついたら此処にいたわけ……………か……………」

ヴェラトローパにそんなのあったか？

「まあ……………うん。アドリビトムにカノン・エアハートはおるか？」

「うん、いるよ」

「それやったら大分説明は省けるな。まあこの世界はルミナシアと
は違う世界だな」

「とうとうエアハートの世界か？」

「いやいや、エアハートの世界でもない。むしろ、この世界には世
界樹も無いからな」

「えッ！？ そうなんだ……………」

カノンノが驚く。

「少し聞きたいんだが、貴様の名前は？」

「ああ忘れてたな。俺は王双や。すずやしいなと似たような名前と

「思えばいいよ」

「成る程。それでは王双。何故、私達を知っていた？私は王双をル
ミナシアで見た記憶は無い」

「あ、私もだよ。何でなの？」

「……言うか。」

「……信じられないかもしれんが……」

そして俺は全てを話した。

この世界と俺の前世も含めてな。

「……正直信じられない話だな……」

「でも私達の事を知っていたよ」

「まあゲームでだけだな」

「だが……私達はこれからどうしたらいいんだ？」

「うーん。何個か案はあるな」

「何ですか？」

「一、ルミナシアに帰る方法を探す。二、帰る方法を探しつつうち
の軍に入って金を貯める。三、俺の嫁へ。四、諦めてこの世界で暮
らす」

「……………おい。三は一体何だ？」

「すみません冗談です」

クロエに剣を突きつけられる。

マジで背中がゾクツとしたわ。

「まあ三は置いていて。どうするんだ？」

「……………三は置いてくんた……………」

何かカノンノが言ってるけど知らん知らん。

「一と四は分かるが二は？」

「ルミナシアに帰るまでに衣食住はどうするんだ？まさか俺が払う
とでも？お前ら二人を養う給金は俺には無いが？」

「……………二で……………」

……………だろっつなあ。

「真名の意味は分かっているだろっつなあ？」

「それは分かっている」

「うん」

「真名はクロエとカノンになるからあまり教えるなよ？」

「それは分かるけど、私達の名前はどつするの？」

「そりゃあ偽名しかないだろうな」

「なら長門が付けてくれ。私達では分からない」

「分かった。なら……………」

何にしようかな……………。

「ならクロエは王平な。んでカノンは関興だ」

ぶつちやけ横山三国志の王平と関興な。

あの二人は好きなんだよなあ。

「分かった。よろしく頼む」

「よろしく願います長門さん」

「ああ」

三人で握手をする。

「とりあえず、美羽達に自己紹介でもするか。明日からこの世界の

文字も覚えてもらおうしな」

しかしまあ、この世界はどうなってんやろな……。

第十話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
（
m

第十一話（前書き）

二百三高地を録画したのに忙しくて見れてない……。

今日こそは見よう。

ユーチューブで孫策の最期の大号令に半泣きします。

第十一話

「……ん……」

朝日の光に俺は目を覚ます。まだ6時くらいだな。

ベッドにはカノンノとクロエが寝ていた。

言っとくけど俺は床で寝たけどな。ほんまだからな。

「……」

俺は二人を起こさないように部屋を出た。

「……はぁ……はぁ……」

俺は鍛練所で腕立て伏せや背筋などの筋トレをしていた。

俺はチートじゃないから戦場で死ぬ可能性はあるからな。

いつもは焰耶達とやっているけど、今日は休みだ。

「さあて、朝メシでも食うか」

筋トレが終わった俺は食堂に向かった。

食堂

「お、美羽、七乃。お早う」

「お早うなのじゃ長門」

「お早うございます長門さん」

食堂に行くと美羽と七乃が朝メシを食べていた。

「あ、美羽。新しく紹介したい奴がいるんだけど……」

「その紹介は昨日、長門が助けた二人かや？」

「………情報はええなおい。」

「まあな、助けた二人は俺の親友でな。元々は西方の商人の娘なんだけど、西方で起きた戦争から一家がこっちに逃げてきたんだけど途中で盗賊に捕まったらしいんだ。それで奴隷に売られて舒邵の倉におったというわけ」

「成る程のう………よし、構わないのじゃ。長門の部下として上手く入れといてやるのじゃ」

「いいんですかお嬢様？そんな簡単に……」

「心配するな七乃。何かあれば長門の責任になるから大丈夫なのじゃ」

「……………（意外と腹黒いな美羽……………）」

七乃の影響だろうか……………。

「まあ朝メシ食ったら会わせるから」

「分かったのじゃ」

俺は急いで朝メシを終わらして二人分の朝メシを貰って部屋に向かった。

「朝メシだぞ〜」

「あ、ありがとうございます」

「済まないな」

部屋に入ると二人は椅子に座って俺の帰りを待っていた。

「一応、この領主には言ったら簡単に了承してくれたから朝メシ食ったら挨拶しに行くからな」

「ああ」

「はい」

二人は頷いて朝メシを食べはじめた。

玉座

「お主らが長門が言っていた二人かや？」

「ああ。右から王平と関興だ」

「「よろしくお願いします」」

二人が美羽に頭を下げた。

「うむ、妾は袁術で真名は美羽じゃ」

「私は大將軍の張勳で真名は七乃です」

「儂は紀靈で真名は零じゃ」

「私は魏延で真名は焰耶だ」

皆が二人と挨拶をする。

「私は王平で真名はクロエだ」

「私は関興で真名はカノンノです」

「ふむ。カノンノとは珍しい真名じゃのう」

零が言う。

「まあ二人は西方の人間だからな。俺らとは違う真名なんだろう。それに服も少し違うだろ？」

「成る程のう」

零が頷く。

「そういえば二人は武官かの？」

「うう〜ん、クロエは武官やるなと思うけどな。カノンノも一応は戦えるけど多分、人は斬った事無いと思うからな」

確かクロエはマイソロ3では戦争の最前線におっいたらしいからな。

「成る程のう。後でクロエと鍛練でもするかの」

「……………」

バトルマニアやるか？

「そついえば零さん。何か報告があるんじゃないかなかったですか？」

七乃が思い出したかのように言う。

「おおそつじゃ。最近物忘れがあるからすっかり忘れておったわ」

「……………ボケか？」

「……………長門、何か言ったかの？」

首下に零の薙刀がそえられた。

「……………何も言ってますん……………」

「長門さん。それを言っちゃあ……………」

カノンノが冷や汗をかいている。

「全く……………実は先日、反乱を鎮圧したんじゃがその時の賊が頭に黄色の布を巻いておった」

零が皆に黄色の布を見せた。

「ふむ。賊にしては珍しいのう」

「カノンノさん達のところではこんなのありました？」

「い、いや。私は色んな反乱兵を見てきたが、布を巻いた反乱兵は見なかった」

「はい。私もそのような反乱兵は見えてないです」

いきなり七乃から声をかけられたクロエが一瞬、言葉をつまりながら答えてカノンノも首を横に振る。

……………これって黄巾の乱だよな？。

「まあとりあえずは何時でも動ける部隊を作って警戒するしかないだろうな」

俺の言葉に美羽達は頷いた。

漢王朝の終わりが近づいていた。

第十一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十二話（前書き）

一応、一話からの改訂はなんとか終わりました。

戦闘シーンがいつの間にか擬音を出している……。

また改訂予定です。

そして三羽鴉と何故かメンマが登場。（笑）

第十二話

それから数週間が過ぎた。

「……黄巾の乱の始まりか……」

頭に黄色の布を巻いた反乱軍は黄巾軍と名乗り、大規模反乱となつていて朝廷は直ちに各大守に鎮圧命令を発令させていた。

「長門ッ！！南西の村が黄巾軍に襲われているぞッ！！」

部屋にいた俺に焰耶が慌てて入ってきた。

「守備兵は？」

「僅かに五百だ。その前に義勇軍千と合流して千五百だが、黄巾軍は約一万だ」

「なら急ぐか。即応部隊は？」

「一個師団が直ぐにでも出動出来る」

「分かった。直ぐに向かうわ」

「おう」

文官の仕事をしている時に袁術軍の再編成を七乃達としていた。

袁術軍は常備軍は十二万がいるらしく、それを現在の師団や旅団等に分けた。

今のところは八個師団（一個師団人員一万二千人）と、四個旅団（一個旅団人員六千人）で常備軍が編成されて、新たな志願兵によって編成された予備三個連隊がいる。

また、24時間何時でも出動出来るように一個師団が出撃準備を整えてあり、これは八個師団による交代制でやっている。

俺は兵士達に新しく配備された鉄の胴鎧、籠手、陣羽織を装着する。（戦国時代の足軽）

一応、機動性を重視しているからな。

んで最後に陣笠を被ってはいい出勤だな。

「……完璧に足軽だよな……」

まあちっちゃい事は気にするな。

「来たか長門」

城の門に行くと零が馬に乗っていた。

「スマン遅れたわ」

「いやいや。まだ間に合うわい。それにしても長門が作ってくれた鞍と鐙は乗りやすくていいわい」

鞍と鐙はまだ三国志の時代には無かったはずやけどまあいいや。

「早く行くぞ長門ッ!!」

「分かってるわ」

焰耶に急かされて俺達は襲われた村に向かった。

南西の村

「ふう……。何とか黄巾軍からの攻撃は凌げたが、いつまで持つか……」

全身に切り傷が特徴の銀色の髪をした女性が溜め息を吐きながら歩いている。

「風い〜」

「風ちやあ〜ん」

そこへ二人の女性が来た。

「どうした真桜、沙和？」

「今、袁術軍の駐留兵と西門の修理をしてるけど後一回くらいしか持たへんで」

「そうなの」

「……此処が死に場所になりそうだな」

「諦めたらアカンで尻」

「そうなの。最後まで頑張ってみるの」

「……そうだな。頑張ってみるか」

二人の言葉に銀色の女性は頷いた。

「そうだ。あの人にも言うっておかないとな」

「黄巾軍の様子はどうなっている？」

「は。態勢を立て直そうと躍起になっています」

近くの林に部隊を隠して、零が斥候からの報告を聞いていた。

「ふむ。長門どうする？」

「俺か？俺なら……黄巾軍が村に総攻撃をする寸前に突撃させるな」

「むう。ならそれでいくかの。村の守備隊も余力が無いと思うから
のう」

確かにな。

「よし、全隊攻撃準備じゃッ！！」

兵士達が頷く。

「……………」

「どうしたカノンノ？」

ふと、今回の戦に初参加するカノンノの表情が冴えない。

「あ……戦なんて初めてだからね。今までは魔物を狩ったりしてた
から……………」

そついやそつやな。

「まあ大丈夫や。最初はキツイと思うけど頑張れや」

俺はカノンノの頭を撫でる。

「あ……………」

ちなみに、クロエは戦争で人を斬った経験があるみたいやな。

「伝令ッ！！黄巾軍が村に総攻撃を開始しましたッ！！」

その時、伝令が来た。

「零……………」

「うむ。全員、抜刀じゃッ！！村々を襲う黄巾軍には情けをかけるなッ！！容赦なくやれッ！！全軍突撃イーーーーッ！！！！」

零は一気に突撃命令を出した。

『ウワアアアアアアーーーーッ！！！！』

兵士達が雄叫びをあげながら黄巾軍に向かって突撃を開始した。

「よし、俺達も行くでッ！！クロエ、カノンノを任したでッ！！」

「あぁッ！！！！」

俺は焰耶と一緒に馬に乗って突撃した。

「ウオオオオッ！！！！」

ザシュッ！！！！

「ギヤアアアツ!!」

黄巾兵士の左腕を斬り落として殴って転倒させる。

「敵将は何処だツ!!」

俺は周りに叫ぶ。

「ハアアアアアツ!!」

「グビヤアアツ!!」

その時、何人かの黄巾兵士が吹き飛んだ。

あ、あの全身に切り傷がある女性は楽進だな。

何でいるんだ此処に？

「村の者かツ!？」

「私は義勇軍の楽進と言いますツ!!」

成る程、義勇軍か。とすると、李典や于禁もいるのか……。

「村の防衛は誠に感謝するツ!!俺と共に敵将を討たないか？」

「は。喜んでツ!!」

楽進が加わってくれた。

「敵将はいずこだッ!！」

「俺だッ!！」

俺がもう一回叫ぶと、北斗の拳のようなボスが出て来た。

「俺はこの黄巾軍の将である馬元義だッ!！」

「楽進。俺が気を引き付けるからその間に奴を討て」

「分かりました」

「行くぞッ!！」

俺は馬元義に突撃する。

「又オオオオッ!！」

馬元義が槍で俺を一突きにしようと槍を出すのが、俺は避けて槍を
掴む。

「なッ!？」

「オリヤアッ!！」

ザシュッ!！」

俺は槍を持っていた馬元義の右手を斬り落とす。

「グアアアアアツ!!」

馬元義は左手で切断された右手を押さえながら悲鳴をあげる。

「今だ楽進ツ!!」

「はいッ!!ハアアアアアツ!!」

楽進はそのまま馬元義を右ストレートで倒した。

「ガハッ!!」

「止めや馬元義」

ザシユツ!!

俺は馬元義の首を斬り落として高々と掲げた。

「黄巾軍の将である馬元義は義勇軍の楽進が討ち取ったアー……
!!……」

俺はそう叫んだ。

「ヒイイイッ!!」

「馬元義様がやられたぞッ!!に、逃げろッ!!」

将を討たれた黄巾軍は慌てだす。

「今じゃッ!!奴らを一匹足りとも討ちもらすなッ!!」

零が叫ぶ。

「やああああッ!！」

ガキインッ!！」

カノンノが黄巾兵士の剣を弾き飛ばす。

「ヒイイイッ!！」

剣を弾き飛ばされた黄巾兵士は慌ててカノンノから逃げていく。

「はあ……はあ……」

カノンノは止めを刺そうにも刺せなかった。

「……やっぱり……私に人は……」

クロエは戦争を経験していたせいか、人を斬るのに躊躇はしなかった。

自分が殺さねば自分が殺されるからである。

「この女ッ!！」

他の黄巾兵士がカノンノに斬り掛かろうとする。

「カノンノッ！！ちい、邪魔だ貴様らッ！！」

近くにいたクロエがカノンノを助けようにも他の黄巾兵士達に阻まれる。

「そりゃあッ！！」

「あッ！？」

カノンノの両手剣が弾かれて、クルクル回りながら地面に突き刺さった。

「死ねやッ！！」

「…………ッ！！（ロックスッ！！）」

カノンノは目を閉じた。

ザシュッ！！

「グアアアアアッ！！」

目を閉じていたカノンノの顔に何かが降りかかる。

それは黄巾兵士の血であった。

「無事かな少女よ？」

カノンノが目を開けると、槍を持ち、白を強調する女性がいた。

「我は常山の趙子龍ッ！！たまたま村に立ち寄った縁だが義勇軍と袁術軍に助太刀いたすッ！！」

第十二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております
m () m

第十三話（前書き）

何か普通に三羽鴉が仲間になった……。

第十三話

「はいはいはいはいーッ!ー!」

「グアッ!？」

「ゲベッ!？」

「アベシッ!！」

趙雲が参戦して、次々と黄巾兵士を倒していく。

「まさか趙雲がいるなんてな……………」

イレギュラーの俺やクロエ達がいるからせいだろうか？

「ええい、考えんのは後だ後。カノンノ無事かッ!！」

「あ、長門。私は大丈夫だよ」

見るとカノンノには傷はついてないな。

「やっぱりカノンノにはまだ早かったかな？」

「……………ゴメンなさい」

「謝るな。俺が悪いんだからな」

「そのこの貴殿ッ！！少しは私の助太刀をしてくれないかッ！！」

おっと。

「悪いなッ！！」

『ギヤアアアアッ！！』

俺は趙雲がいるところまで走って、困んでいた黄巾兵士達に閃空
裂破をかける。

「ほう。中々面白い技ですな」

「そりゃあどうも」

俺はそう言いながら黄巾兵士を斬る。

「俺は王双。俺の背中は預けたぞ趙雲」

「任せよッ！！」

俺と趙雲は黄巾兵士達に突撃をした。

そして黄巾軍が全滅するのは約三時間もかかった。

「ふう……………」

俺は水を飲む。

本当は祝杯として酒でも飲みたかったけどもうすぐしたら帰るしな。

「あ、此処でしたか」

「ん？楽進か。どうした？」

休憩をしていると、楽進達三羽鴉と趙雲がやって来た。

「王双殿。助けに来てくれてありがとうございます」

「いや、逆に俺が頭を下げないとアカンよ。村を守ってくれてありがとう」

俺は四人に頭を下げる。

「い、いえそんな。私達はたまたま立ち寄っただけですから……………」

「いやいやそれでもだ。それに楽進達は義勇軍だろ？なら、村を守備してくれた御礼っちゃんあんだけど、武器と食糧を提供するよ。趙雲は路銀か？」

「ほう。何故路銀だと？」

「多分、メンマの買い過ぎだと思ってな。俺も旅をしていた時に趙雲の噂を聞いた事があったな。まあ武芸はかなり強いんだけど、好物がメンマという女性がおったくらいしか知らなかったけどな」

「ほう、私も中々の人気ですな」

趙雲が笑う。

「それでどんだけ欲しいんだ？」

「……いえ。そうではないんです」

「……どゆこと？」

「私達、義勇軍を袁術軍に加えてくれませんか？」

「……何？」

「うっそお……。」

「それは……本気なんか？」

「はい。それに私は貴方に借りが出来ています。馬元義は貴方が討つたのに、私と偽って言いました」

「あれは止めをやったのは楽進だと思って言ったまでだしさ……。」

「それでもです。それに貴方の部下になってみたいんです。加えてくれませんか？」

……まあいいか。戦力が増強されるんもいいいな。(てか曹操の兵力が減るけど別にいいか)

「……姓は王、名は双だ。真名は長門。よろしくな」

「は、はいッ！！私の真名は凧です」

「ウチは李典や。真名は真桜や」

「私は于禁で真名は沙和なの」

俺は三人と真名を交換する。

「王双殿。私も客将として加えては下さらんかな？私も貴方に少々興味を持ったので」

「いいのか趙雲？」

「はい」

「そづか。ならよろしくな趙雲」

……まさかの趙雲ゲットですッ！！(´・´・´・´)

そして、俺達は新たな戦力を加えて南陽に帰還した。

「ハアアッ!!」

「と、わっと」

俺とクロエは只今鍛錬所で訓練中。

理由は俺にクロエのテイルズ技を教えてほしいためなんだよな。

流石に虎牙破斬と閃空裂破だけはなあ……。

というわけで、二人で木刀を持ってやってるわけ。

「これが幻晶剣だ」

「こっつか？ハアアッ!!」

回転しながら剣を振り回す。

「そっだ。それが幻晶剣だ。それにしても上達が早いな」

「なあに、クロエの指導が良いんだよ。な、クロエ師匠」

「ク、クロエ師匠だとッ!!むう……中々良い響きだな」

……何か意外と気に入ってるな。

「もう昼か。クロエ、メシでも食べに行こうか？」

「うむ。そろそろね。」

俺とクロエは片付けて鍛練所を出た。

第十三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております
m () m

第十四話(改)(前書き)

拠点イベント。

そして最後のは……。

第十四話（改）

俺とクロエは昼メシを食べるために街に来ていた。

本当は城の中にも食堂はあるんだけど、給料から引かれるし意外と高いんだよなこれが。

そこら辺は大阪の血が騒ぐのか、城下街の料理屋で食べている。

「さて、クロエは何を食べる？」

「パスタとかあれば嬉しいんだけど、生憎無いしな」

「まあそれは仕方ないよなな」

「それに、パスタとかパンを食べていたからこういうのはあまり食べてなかったからどれが美味いか分からないからな」

「なら適当に頼むか。お姉さぁん、ラーメンの大盛り二つに焼き飯一人前ね」

「ハッハッハ。お姉さんとは嬉しいね。チャーシューを追加で入れてやるよ」

おばちゃんが豪快に笑いながら言う。

「あながとねー」

「お前は誰とでも仲良くなれるな……」

「まあ何回も出入りしてたらそうなるわ」

「はいよお待ちツ!!」

そこへラーメン大盛り二つと焼き飯一人前が来た。

「ほんじゃま、食べるか」

「そうだな」

うん、いい匂いだ。

「アーーッ!!隊長なのツ!!」

「クロエもおるやんけ。デートてやつなんか？」

そこへ、真桜と沙和が来た。

ちなみに、凧達の義勇軍は街の警備隊に編入されており、警備隊隊長には俺が就任して凧達は俺の部下になっている。

後クロエとカノンもな。

ちなみに俺とクロエは今日は休みだからな。

そして真桜と沙和は両手に大量の袋を持っていた。

「デ、デートだとッ!？」

おいクロエ、顔を真っ赤にするなよ。

「お前らこそ何をしているんだ？今日は警備している日と違つのか？」

「ア、アハハハハ……」

……成る程な。

「サボりが」

「ウ……」

やっぱりな。

「お前らな、少しは仕事に熱中しろよ」

「だって毎日毎日見回りやねんで？」

「いくら私達でも飽きちゃうの」

そう言いつつ、肉まんを食べている。

「俺は知らんぞ……」

そう、真桜と沙和の後ろにはかなり怒っている風と冷や汗をかい

ているカノンノがいた。

「……………真桜う……………沙和あ……………」

「「ッ!?」「」

あゝ死んだなあれは。

「クロエ、退避だ」

「うむ」

「ちょ、隊長ッ!…それは無いでッ!…!」

「そうなのッ!…!」

「真桜……………沙和……………諦める……………」

「「酷いッ!…!」「」

「何をサボっているんだ!…!…!」

「「ギヤアアアア!…!…!」

南陽に二人の悲鳴が響いた。

「隊長おゝ。何で助けてくれへんのやゝ」

「隊長酷いの」

「いやお前らがサボるから悪いんだろ」

夜、俺はあの後から二人にグチグチ文句を言われている。

「……給料、二割下げるぞ」

「全力で働かせていただきます（なの）ッ！！」

俺の言葉に二人が頭を下げた。

やっぱりこの言葉は二人を働かせる口実だな。（駄々こねる時に使うか）

「全く……ん？」

中庭を通ると、趙雲が酒を飲みながらツマミとしてメンマを食べていた。

「よう趙雲。月を見ながらの酒か？」

「これは王双殿。そうですね、今宵はいい満月ですぞ」

確かに綺麗な満月だな。

「美味そうなメンマだよな？」

「ほう。王双殿はメンマの良さが分かりますか」

「まあメンマは好きな部類に入るな」

「おおッ！！漸くメンマ好きな人間と出会える事が出来ましたぞ」

「……分かったからそんなに興奮するな。それと胸が当たってるか」
「う」

「おっと、これは失礼。メンマ好きがいると話が進むので」

まあ好きなのが共通している奴がおると話が進むからな。

「ちょっとだけ付き合うか」

「これはこれは、かたじけないですな」

それから俺と趙雲は約三刻程飲んだ。

「頭いてえ」

俺は頭を右手で押さえながら廊下を歩く。

「ちょっと飲み過ぎたな。てか、趙雲は酔ってなかったよな……」

意外と強いな……。

「あ、あそこ行かな……」

俺は頭を押さえながら鍛冶屋に向かった。

「こりゃあ王双隊長。朝からご苦労様です」

「おう」

薬屋の店員が俺に挨拶をしてくる。

「んであれは出来たのか？」

「あ、はい。隊長から貰った書簡を見て作りました」

店員は俺に袋を渡す。

袋の中は黒い粉末があった。

「これがあつたら火計とかやりやすくなるだろうな」

俺は黒い粉末を見ながらそう言った。

第十四話(改)(後書き)

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十五話（前書き）

一応出来たけど、改訂するかも。

M Cあくしず買ったよ。

長門、神通、九七式艦攻……貴女達はとんでもない物を盗んでいき
ました。

美羽「阿呆かの？」

俺の心です（キリ）、・・・（

七乃「馬鹿ですね」

だって三人マジパネえしさ。

作中に出すか。

零「馬鹿じゃのう」

第十五話

「長門。美羽様が呼んでおるぞ」

「本当か？」

鍛練所でクロエと焰耶の三人で鍛練をしていると、零が俺に言うてきた。

「ならちよつと玉座まで行ってくるわ」

「分かった」

クロエと焰耶にそう言うって俺は玉座に向かう。

「どうしましたか美羽様？」

「……別に美羽でも構わんのじゃ」

「公私混同は駄目ですから美羽様」

「むう……………」

美羽、拗ねるな。

「それで何か御用ですか？」

「ああ。黄巾軍がまた妾の領内で暴れておるみたいじゃから長門を司令官にした部隊で鎮圧してきてほしいのじゃ。場所は南西十二里の村じゃ」

「それは構いませんが、黄巾軍の数は？」

「凡そ一万二千です」

傍らにいた七乃が言う。

「……………前回とは数が違うな」

「はい。今回は荊州にいる一部の黄巾軍も合流したみたいですよ」

数が増えるのはめんどくさいな。

「分かった。頑張ってみます」

「頼むのじゃ」

俺は美羽に頭を下げて玉座を出た。

「んで、出動出来るのが第三師団と第六師団が」

「後は他のところに行ってるの」

沙和が報告する。

今回、出撃する武将は俺、趙雲、クロエ、カノンノ、沙和の五人だ。

カノンノは前回の事もあって出撃は見送ろうとしたけど、カノンノが「お願いします」と直訴をしたのでそのまま出撃させる事にした。

「んじゃあ急いで出撃。早くしないと死人が沢山出るからな」

「分かったなの。そこ、サツサと歩けッ！！ちんたらしていると貴様らに付いている〇〇〇を切り落とすぞッ！！」

『サーイエツサーッ！！』

……元気だなあ。

「隊長。斥候からの報告だと黄巾軍は山あいに潜んでいるよつなの」

沙和が報告してくる。

「山あいか……」

「王双殿、何を恐れている。黄巾軍は所詮は烏合の衆。雑魚に兵法は無用、一斉に突撃をしたら充分に勝ち目はありますぞ」

趙雲が強引の突撃を具申してくる。

「趙雲。いくら烏合の衆でも畏くらはしてあるって」

「ですが……」

「とりあえずは斥候を多く放って、地形を調査。奇襲をしやすい場所を選んでそこで黄巾軍を叩く」

俺の決定案に趙雲は悔しそうに俺を見ていた。

「カノンノ。アレはちゃんと持ってきたか？」

「うん。でもアレなんか何をするの？」

「……ちよつと残虐な行為だな」

「え？」

「隊長大変なのッ!!」

そこへ、沙和が走ってきた。

「どうかしたのか沙和？」

「ちょ、趙雲ちゃんが黄巾軍に単騎突撃したのッ!!」

……やっぱりな、まさかとは思ってたけど……。

「……助けるか。貴重な仲間を失うわけにはいかんしな。沙和、……
……はるか？」

「斥候の話したとあの両側にそりたつ壁があるところなの」

沙和が場所を指差す。

「よし、カノンノは俺とこい。クロエと沙和は……だ。分かつたか？」

「分かった」

「分かったの」

さあて、やるか。

「やはり王双殿も英雄になる人物ではなかったか……まあいい。これが袁術軍での最後の奉公だ」

山あいの開けた場所で黄巾軍に囲まれた趙雲は武器を構える。

「恐れる者は背を向けよッ！！恐れぬ者はかかってこいッ！！我が名は趙子龍ッ！！一身これ刃なりッ！！」

「ぶち殺せエー……ッ！！！！」

『ウオオオオオオー……ッ！！！！』

黄巾軍が趙雲に突撃する。

「はいはいはいはい……ッ！！！！」

趙雲は攻撃をかわしつつ、黄巾兵士の腕や頭を斬り、その命を刈り取る。

しかし……。

「（チッ……倒した敵で足場が……）」

「身動き出来なくなってるぞッ！！取り囲んでなぶり殺しにしろッ！！！！」

「くっ……だが私はまだ負けんッ！！」

趙雲が攻撃をしようとした時だった。

「インブレイスエンドッ！！！！」

『ッ！？』

突如、黄巾軍の上空から巨大な氷の塊が降ってきた。

『ギヤアアアアアアーッ！！！！』

運悪く、氷の着弾地点にいた黄巾兵士は押し潰されて圧死した。

王双SIDE

「……私、人を殺したんだ……」

俺の前にいるカノンノが呟く。

「……気にするなと言わん。でもこれが現実だ」

「うん……」

カノンノと馬で二人乗れ中。

「カノンノ、援護してくれ」

「うん……」

俺は日本刀を抜く。

「突撃イイイイッ！！！！」

ザシュッ!!ザシュッ!!

「ぐへッ!?!」

「ガパアッ!?!」

黄巾兵士の首や腕を斬り、それが宙を舞い、血が雨となる。

「バーンストライクッ!?!」

カノンノが援護射撃として上空から複数の火炎弾を黄巾軍に降らせる。

「ギヤアアアアアッ!?!」

「な、何だコイツらはッ!?!」

「……王双殿……カノンノ……」

趙雲は思わぬ援軍に手を止める。

「ハアアアアッ!?!」

『ギヤアアアアアアッ!?!』

「趙雲ッ!?!」

閃空裂破で黄巾兵士を倒すとやっと見つけたな。

「王双殿……………」

「馬鹿野郎ッ！！なに単騎突撃してやがるんだッ！！死にたいのかッ！！！」

「し、しかし奴らは……………」

「足場が無くなりかけてやばそうだったのにそれでも黄巾軍を烏合の衆と言つのかッ！！ああッ？」

「……………」

俺の怒りに趙雲が黙ってしまった。

「まあいい、お前が無事だったからな。とりあえずこいッ！！」

「あ……………」

趙雲の手を取ってカノンノの元まで戻る。

「カノンノ行くぞッ！！」

「はいッ！！」

俺達は馬に乗って逃げる。

「奴らを逃がすなッ！！」

黄巾軍は慌てて追い掛けてくる。

俺達は逃げる中、谷を通る。

『今だ（なの）ッ！！』

その時、谷の上に潜んでいたクロエと沙和の部隊が一斉に木々や石を道に投下して逃げる道を塞いだ。

「何ッ！！」

「お頭ッ！！後ろの道も塞がれましたッ！！」

「なッ！？奴らの狙いは道を塞ぐ事だったのかッ！！」

お頭が叫ぶ。

「ぶっかけるッ！！」

そして、クロエと沙和の部隊が何かを閉じ込めた壺を投げたり黄巾軍にかけたりした。

「これは……油？」

割れた壺を見た黄巾軍兵士が呟いた時、クロエ、沙和の部隊兵士が火がついた松明を次々と投げた。

「や、やめ………」

ポウウッ！！

火が一斉に広がり、黄巾軍は炎に包まれた。

第十五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m (m

第十六話（前書き）

皆さんメリークリスマスです。

趙雲が簡単に仲間になってしまった……orz

最後のは伏線です。

ある二人が出るためです。

土每包み込んだ。

「……酷いな……」

クロエが崖の上からその光景を見て呟く。

「クロエッ!!」

「カノンノッ!!無事だったか……」

俺達はクロエ達と合流する。

「長門。これは一体……」

「魚油を使った火計だ。まさかこんなに成功するとは俺も思わなかったけどな……」

俺達の役十五メートル下の山道では一万二千の黄巾軍兵士が焼かれている。

俺は谷があるところまで黄巾軍を誘導した。

後は今さっきした事だな。

「……うえ……」

俺達の下であまりの阿鼻叫喚な世界に、カノンノが戻した。

「カノンノと気分が悪い奴は下がっけ。絶対に夢に出るからな」

俺も下に視線は向けてない。

絶対に夢に出るからな。

「さて……趙雲」

「……は」

「……とりあえず生きててよかったな趙雲。俺達が来るまでよう頑張った」

俺は安堵して趙雲を労う。

「……え？」

「傷は大丈夫だったか？」

「……へ？」

「だから傷だって」

「あ、ああそれは大丈夫だが……」

「ならよかったな。ああそれとホイ」

俺は路銀が入った袋を投げる。

「どうせ、戦が終わったら抜けるつもりだったんだろ？なら今やるわ」

「王双殿……………」

「おうお前ら、黄巾軍が全滅したら順次埋葬していくから準備しろよ」

俺は兵士達に告げていく。

「……………何故何も言わないのですか……………」

「ん？何をだ？」

「私が勝手に出撃したのを怒らないんですか？」

「俺は美羽から命を受けた黄巾軍討伐の指揮官だけど、趙雲は客将だ。俺達の味方だけどあくまでもお客なんだから部下では無いからな。そりゃあ部下だったら最悪斬首かな」

「で、ですが王双殿が……………」

「お前じゃなかったら助けてなかったよ趙雲。先走りばいけど、お前の武はびかーや。お前をこんなところで死なせるわけにはいかなからな。……………それに趙雲はマジ可愛いから死なせたら全国の趙雲ファンに俺がぶっ殺される」

「……………」

「そうそう、出ていくのは構わんけど、他の軍に入るならそれなりに規律を守れよ。そうじゃないと、お前は多分早死にするからな」

「……………」

それから、頃合いで用意してた水で消火活動をして、俺達は焼死した黄巾兵士達を丁寧に埋葬していく。

「……………夢に出て来そうだ……………」

「なら始めからするな……………」

俺の言葉にクロエが溜め息を吐いた。

「美羽の領内に入らせないようにする策はこれくらいしか浮かばなかったんだよ……………」

「……………成る程。噂を広げさせなおかつ袁術を恐れさせ、入らせないようにか。だがその分、黄巾軍は他の領へ行かないか？」

「それは仕方ない。それに、俺やクロエはチートじゃないんだから全部の黄巾軍の鎮圧とかは無理だからな」

「……………そうだな」

クロエはゆっくりと頷いた。

「隊長。大体の埋葬は終わりました」

そこへ伝令の兵士が来た。

「よし、なら帰るか」

夜中まで埋葬が終わらず、俺達は戦死者の埋葬を終わらすと、黙
禱を捧げた。

夜、天幕

黄巾軍の戦死者の埋葬は長引いたので、陣営を設営して一泊する
事にした。

「……………失礼」

「ん？どうした趙雲？」

俺の天幕に趙雲が急に来た。

「王双殿……………いえ主。私の先走りで主に、そして袁術軍全体に迷惑
をかけてしまいました。申し訳ありません」

……………。

「待て待て待てツ！！何があつた？何があつたんだ趙雲ツ！！」

まさかどつかで頭でも打ったのか……………。

「頭は打っていません主。私はどうやら少々自惚れていたようです。

それを主は教えてくれました」

……何か教えたか俺？

「それで……私を袁術軍の末端に加えてくれますかな？」

「……それは心強いよ趙雲」

「ありがとうございます主。それと私の真名は星です。預かってくれませんか？」

「……分かった。預かせてもらおう星。その代わりに、俺の真名である長門を預かってくれないか？」

「承知しました主」

………何か趙雲　　星が正式に袁術軍に入ってくれたじえい。

「そん代わりに規律とかは守ってな」

「それは分かっています。それでは主、また明日」

「おう、また明日な」

星は俺に頭を下げて天満を出た。

「……予想外な事が起きたけどまあいいや。さて、俺も寝るかな」

「隊長」

俺が寝ようとした時、兵士が入ってきた。

「どうした？」

「は。妙な箱を見つけたので報告に来ました」

「妙な箱？」

……凄く嫌な予感しかしないんだけど……。

「この箱が、陣営の叢に落ちていました。数は全部で五つです」

兵士が俺に箱を渡す……ってまたマイソロシリーズの道具箱かよ

……。

何でこれが？

「まあご苦労だった。後は俺が調べるから休んでいいよ」

「は。失礼します」

兵士が天満を出たのを確認すると、俺は五つの箱を開けた。

「……………設計図と黒色火薬？」

黒色火薬は自分らでも生産中だから直ぐに分かったけど、これは何か古い設計図だな……………は？

「……………マジ？」

設計図を見て俺は眩いた。

「……………まあ実現が出来るかどうかの問題だな。真桜にも見てもらうか。とりあえず寝よ、俺は眠い」

全部明日だ明日。

俺はそう思って目を閉じた。

第十六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十七話

俺達は一泊した後、南陽に戻り玉座にいる美羽に報告するために玉座に向かった。

玉座

「美羽様。黄巾軍を鎮圧させてきました」

俺は美羽に臣下の礼をする。

「うむ、ご苦労じゃ長門。それと、趙雲が我が軍に入るのは真か
」？」

「はい。昨夜、自分に言ってきました」

「そうか、なら後で挨拶をしなければの」

美羽が嬉しそうに頷く。

「それでは自分は失礼します」

「うむ。今日はゆっくりと休んでくれなのじゃ」

俺は美羽に頭を下げて玉座を退出した。

「あ、真桜のところに寄りないとな」

あの設計図を見せなあかんしな。

真桜の部屋

「真桜、おるか？」

「お、隊長やないか」

部屋に入ると、カラクリの部品があちらこちらに散らかっている。

「これは入れられへんな……………」

「ああそこら辺のは退かしても構わへんで」

「ならお言葉に甘えて……………」

カラクリの部品を退かして座るスペースを作る。

「いきなりどないしたんや隊長？」

「ああ、何も聞かずにこの設計図を見てくれ」

俺は真桜に設計図を渡した。

「どれどれ……………」

設計図を見ると、真桜は固まった。

「どうや？それらは作れるか？」

「……………た、隊長ッ！…何やこれッ！！」

「お、おい」

真桜が急に抱き着いてきた。

「この設計図を見てたらウチが作ったカラクリは全部玩具やでッ
！！」

そついや真桜がどんなカラクリを作ってるか俺は知らんな。

「んでさ真桜。これは生産が可能なんか？」

「うーん……………多分やな。材料があれば作れると思うで」

……………チートやな。

「言っとくけど、それはこれを除いたら鉄やで」

「ほんまなんッ！？」

「ほんまほんま」

俺は頷く。

「確かコイツは青銅で作れるから」

「なら作れると思うわ。てか何で隊長はこんなんを持ってんの？」

「昨日、兵士が道具箱を見つけて中身がこれやったんや。それとそれの炉の作り方も書いてあるわ」

「そうなんや……とりあえず、これを製造してみるけど、資金は大丈夫なん？」

「資金は工作隊に振り込む。今までの二・五倍やな。頼むで真桜。もしかしたらそいつは……いや何も無いわ。んじゃ頼むな」

俺は真桜の部屋を出た。

「……何やったんやろ？何か言いかけてたけど。まあええや、作ってみるか。ウチのカラクリ魂が燃えてきたでエッ……！」

真桜は色んな意味で燃えていた。

「………って待ちいや隊長ッ……！忘れ物やでエッ……！」

真桜は何か気づいて慌てて長門を呼ぶ。

「て、もうおらんッ………探しに行くか。隊長め、覚えとけよ」

真桜はブツブツ言いながら、袋を持って部屋を出た。

市場

「おばちゃん、葱とキャベツ頂戴」

「あいよ」

俺は葱とキャベツを受けとって、代金を渡す。

「え〜と、後は小麦粉やな」

俺は店を探す。

「おっちゃん、小麦粉を一袋頂戴」

「あいよッ!」

「よし、こんだけやったら出来るかな?」

俺は食料を買つと城に戻る。

「あれ?何してんのや真桜?」

俺の部屋の前で真桜が座り込んだ。

「何処に行ってたんや隊長ツ！！もう、城中探してたんやで」

「何かあつたんか？」

「ほらこれや」

真桜が袋を差し出して、中身を見ると……。

「……………そついや真桜に頼んでたな」

マジで忘れてたな（汗）

「お詫びに真桜も食べるか？」

「何か奢ってくれるんか？」

「まあな」

俺は真桜を連れて、中庭に向かった。

中庭

「何で端つこに鉄板があんの？」

「俺が鍛冶屋に頼んで作ってもらったんや（キリ）……………」

「ふん」

興味無しかよ……。

「まあいいや。材料は切ってボールに入れたしな。後は火を付けるだけやな」

「隊長、何を作るんや？」

「ん？なに、俺の村でよく作られてた物を作ろうと思ってな」

真桜に作ってもらったのは料理器具のお玉にボールとヘラや。

もう何となく分かった読者もいるな多分。

「ふむ、暖かいな。入れるか」

ボールの中には小麦粉と刻んだ葱とキャベツが入っている。

それをお玉で掬い上げて、熱くなっている鉄板にゆっくりと落とす。

ジャーツ。

形は丸くするようにして……。

「これでしばらく待つんや」

おっと蓋や蓋。

ポクポクポクチーン。

「もうええやろ」

蓋を開けると程よく焼けていた。

「隊長、何やこれ？」

「これはねぎ焼きという小麦粉を主体にした食べ物や」

「へえ」

ほんまやったら醤油をチヨロツとかけて食べるのがいいんやけど、この時代は無いからな。

ラーメンは何でかあるけどな。

「まあ食べてみい」

「ほないいただきます………うん、中々美味いな」

「キャベツも入ってるから葱特有の辛味は半減してるからな」

小学生の時に食べたねぎ焼きは葱だけやったからなあ。

葱はあんまり好きやなかったからあれは少しきつかった………（
遠い目）

「ほう、何やら面白そうな催しをしていますな」

そこへ星が酒瓶を抱えながらやってきた。

「食べるか？」

「いただきますよう」

それから、話を聞きつけた美羽や七乃、零も来て宴会に発展してしまっただな。

第十七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第十八話（前書き）

今年最後の投稿になると思います。

F X、ライトニングに決まったのはいいけどライトニングが配備されるまでに戦闘機の生産はしてほしいな。

F 2の生産ラインは閉じてるけど……。三菱、やってくれ。

あえてF-2スーパー改に期待したいな。（中国対策でもう一個飛行隊欲しいし、津波でおじさんしたF 2Bの代わりとか）

七乃「それは無いんじゃないですか？」

ロッキードに提供するお金を無しにしたらよくね？その分減るし。

七乃「そんな簡単に出来たら自衛隊は軍になってますよ」

だよなあ〜。

第十八話

それから数ヶ月が過ぎた。

黄巾軍は勢いを取り戻した官軍の猛攻に遭い、徐々に勢力を縮小させていった。

そして、遂に黄巾軍は劉表が治めている荊州の一部を占領している主力部隊以外は全滅をしまい、主力部隊は官軍との一大決戦の構えを取った。

玉座

「荊州の劉表から援軍を求めてきておるのじゃが、出すべきかの？」
皆が集まった玉座で、美羽が皆に聞く。

「私としてはお嬢様を司令官にして出撃するのが最良かと思えます。恐らくこれが黄巾軍との戦いになるのでお嬢様も出撃すれば士気も上がります」

大將軍である七乃が美羽に言う。

「それに荊州の黄巾軍は主力部隊で、有力な軍が出撃してくるようです。今のところ判明しているのは、孫策、曹操、董卓、それと各地で人気が出ている天の御使いと劉備が率いる義勇軍です」

「麗羽姉様の軍は出ないのかや？」

「袁紹軍は黄巾軍に手痛い打撃を与えられてほぼ編成中です」

「ふむ。七乃の提案に何か意見はあるかの？」

『……………』

俺達は何も言わなかった。

「では零を司令官とした攻略部隊を荊州に派遣するのじゃ。後の詳細は零に任せるのじゃ」

「分かりました美羽様」

俺達は美羽に臣下の礼をした。

作戦室

俺達は玉座から出ると、作戦室に行った。

これは俺が作った部屋だな。

「では、攻略部隊に加わる武将だが儂を筆頭に長門、凧、真桜、ク
ロエ、カノン、焰耶だ。沙和は悪いが今回は待機だ」

「分かったなの」

沙和が頷く。

「攻略部隊の兵力は第一、第二、第三師団の三万六千じゃ。何か質
問は？」

「いや俺は無いな」

「私も無い」

「ウチもや」

皆は異論は無かった。

「よし。では準備が整い次第、荊州に出撃する。解散ッ!!」

俺達は作戦室を出た。

門前

南陽の門の前に攻略部隊が集結していた。

勿論、俺も鎧を着て整列してる。

「それではこれより荊州に向かうッ！！総員、生きて帰るぞッ！！」

『ウオオオオーッ！！』

兵士達が雄叫びをあげた。

そして、攻略部隊は荊州にある黄巾軍の占領地へ向かった。

攻略部隊は三日かけて、荊州に入り黄巾軍占領地へ進出した。

「前方に陣営じゃと？旗は？」

「は。孫呉の旗です」

斥候が零に報告する。

「ふむ。長門、どう見る？」

「多分、俺達と同じく劉表から援軍要請を受けたんだろ」

「敵同士だったのにお……」

「国内の大規模反乱だから手を取るのもやむを得ないんだろっ」

「零殿。使者でも放ちますか？」

「そうじゃのう」

凧の言葉に零が腕を組む。

「なら俺と焔耶で行かしてくれないか？」

「二人か？」

「一応、孫堅とは面識があるからな」

「ああ」

「なら使者をやってくれ」

「了解や」

俺は零にニヤリと笑った。

「止まれッ!!」

俺と焔耶が孫堅の陣営まで行くと兵士達に捕まった。

「何者だッ!!」

兵士達が俺と焔耶に槍を向ける。

「俺は袁術軍の使者だ。我々は劉表の援軍要請に荊州に参つたが貴軍の行動を問いたいッ!!」

「暫し待たれよッ!!」

兵士達は上に報告しに行つた。

それから直ぐに帰つてきた。

「孫堅様がお会いになられるとの事だ。こちらへ案内する」

「了承した」

俺達は兵士の後について行つた。

孫堅の天幕

「王双ッ!? 久しぶりだなッ!!」

「ちょ、孫堅ッ!?!」

孫堅の天幕に入ると、俺を見た孫堅が一目散に俺に抱き着いてきた。

「全く。中々見かけないから死んでいるのかと思つたぞ?」

「分かったからとりあえず離れて？」

む、胸が……。

「はいはい。それで、此処にいる理由だったな。私らも劉表から要請が来たんだ。全く、黄巾の乱じゃなかったら攻めていたのにな…

…」

サラっと言うなよサラっつと。

「俺達も要請が来たから一緒に行かないか？」

「あらそれは良いわね」

アツサリと了承してくれたな。

「焰耶、悪いけど零達を呼んできてくれ」

「分かった」

焰耶が頷いて天幕を出た。

「王双、改めて礼を言いたい。私を助けてくれてありがとう」

孫堅が急に俺に頭を下げた。

「お、おい……」

「本当に感謝しているんだからね。あ、御礼に私の真名を預けるわ」

「……分かった。預らせてもらっわ」

「私の真名は夏蓮よ」

「俺の真名は長門だ。よろしくな夏蓮」

「ええこちらこそ」

俺は右手で孫堅と握手をした。（孫堅は右手しかないため）

「夏蓮様。お食事の用意が出来ました」

そこへ……青と白が特徴の肌をして、目は青く、羽をパタパタと動かしている小さな生き物が天幕に入ってきた。

「「あ……………」」

孫堅と生き物はしまったとの表情しているが、俺は別の意味で驚いていた。

「……………ロックス……………」

マイソロ₃でカノンの執事をしているロックス・プリングスがいたからだった。

第十八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

特別編（前書き）

読者の皆様、新年明けましておめでとうございます（――） m

今年もよろしく願います m（――） m

特別編というか今年の抱負とかです。

後は桜花の真名設定とか。

特別編

零戦「読者の皆様、新年明けましておめでとございますm(´▽｀)
m。作者の零戦です」

長門「主人公の長門だ」

零戦「いやあ、『曹徳の奮闘記』がまさかのお気に入り件数が九百
越えにただ驚いてます」

長門「やっぱ恋姫は凄いな」

零戦「そうだなあ」

七乃「ところで作者さん。今後はどうなるんですか？（ちなみに七
乃の姿は着物を着ている）」

長門「……いい……（何故かラピユタ風）」

零戦「黄巾軍を壊滅してから数話程拠点イベントやな。それから洛
陽に行くな。それから反董卓やな」

長門「何で洛陽に？」

零戦「桜花のイベントフラグ、霞のイベントフラグ+筋肉マッチョ

の二人とのイベントやな」

長門「……何であの筋肉マッチョ二人なんだ？」

零戦「まあちよつとな。後は本編でな」

焰耶「私と長門のイベントフラグはどうした？（着物着用）」

零戦「ま、まあそれも追い追いとな」

長門「……いい……」

七乃「そういえば、華雄さんの真名は何で桜花なんですか？」

桜花「そうだな（着物着用）」

零戦・長門「「ブハアッ!?（。 。）……桜花の着物姿はマジいい……」」

カノンノ「……本当に桜花さんが好きだね……」

クロエ「関羽や曹操が好きな奴らがいるのにな」

零戦「桜花は一目見た時に惚れたな……。ああ桜花の真名だったな。桜花はゲームでもあつという間にやられたやろ？何か相應しい名前が無いんかなあ」と探していたら桜花だったわけ」

桜花「何で桜花なんだ？」

零戦「……たまたまチューブで松本零士の音速雷撃隊を見てい

てな。航空特攻兵器『桜花』でいこうと思ったんや。桜の花はパツと散り、華雄もパツと散った。自分的に似てるなあと思ったんや」

桜花「成る程な」

七乃「それでは作者さん。最後に今年の小説の抱負をお願いしますね」

零戦「今年は恋姫の完結を目指す事やな。後はノクターンでこの恋姫の工口場面を書く事やな。ちなみに最初は七乃の予定や」

七乃「作者さん。マジでお願いします(土下座)」

全員『土下座かよッ!? (。。(』

零「普通は桜花じゃないのか？」

零戦「俺的に七乃、霞、桜花、三羽鴉、クロエ+カノンノ、零、蓮華、夏蓮、美羽の順に構想している」

ロックス「何でお嬢様も入ってるんですかアアーーーーッ!!!!(血涙)」

零戦「そりゃあカノンノ好きやからねえ。後、マイソロキャラは後一人出るし、オリキャラはまだ四人出るけど、四人のうち三人は本当に出すかは未定なんだよねえ」

七乃「中途半端ですね」

零戦「だって未定やもん。ネタバレやけど三人はあるゲームキャラ

やな。ロープレとか違うし」

長門「てかエロは書けるのか？」

零戦「フッフッフ。こんな事もあるつかとッ！溜めてきたエロ小説本があるから火が噴くでッ！！」

七乃「……何かやばそうですから此処までにしますか」

零戦「そうやねえ。それでは今年も」

全員『よろしくお願ひしますm(_____)m』

特別編（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております
m
（
m

第十九話（前書き）

やっぱり美羽は蜂蜜水でしょうね。

第十九話

「わ、私を知っているんですかッ!？」

ロックスがビュンと近寄ってきた。

「あ、ああ。クロエとカノンノが袁術軍にいるからな」

「な・ん・で・す・っ・てッ!？」

……かなり驚いてるな。

「お嬢様は……お嬢様は無事なんですかッ!？」

「ちょ、落ち着けッ!！」

泣きながら服を掴むな。

「こ、これは失礼しました」

「まあとりあえず、ウチの軍と合流してからやな」

マジ怖いよロックス……。

そして漸く袁術軍と合流して零達は夏蓮に面会した。

「お嬢様あ~~~~ッ!!!!」

「ちょ、ちょっとロックス。泣かないでよ」

……ロックスが凄く号泣してるな。

てかあんなキャラだったか？

「そうか。ロックスは孫堅殿に保護されていたのか……」

「そうよ。あの負傷した帰りでもまたま道端に寝ていたからね」

「……よく持って帰ったな？」

「面白そうだったからね」

「……」

やっぱり孫策の母親だな。

「ロックス。ロッタとしいなは分からないの？」

「……はい。僕が倒れてた近くにしいなさんとロッタさんはいなかったようです」

ふむ、ロッタの回復技は重要だからな。

もしかしたら周瑜の病気も……………。

「こっちからも二人の搜索をやってみるから」

「ありがとう長門さん」

カノンノが頭を下げる。

「気にしないでいいよ」

「それにしても……………久しぶりですよのじゃ夏蓮殿」

美羽が夏蓮に頭を下げる。

「ええ久しぶりだね美羽」

「二人は会った事があるのか？」

俺は七乃に聞く。

「はい。周昂や劉表との戦いに参加していましたから。夏蓮さんは美羽様を我が子のように愛してくれていますよ」

成る程な……………。

「あら？美羽じゃないの」

そこへ……………あれは多分孫策だな。

「お、雪蓮か。紹介する、長女の孫策だ」

「貴方が母様を助けてくれた王双なの？」

「ああ王双だ」

「母様を助けてくれてありがとう王双」

「いや、たまたまだよ」

俺と孫策が挨拶をする。

「……………」

「どうしたのよ美羽？」

「ピエツ！？な、何も無いのじゃ雪蓮……………」

…………… 何で怯えてるんだ？

「おい七乃。何で美羽は孫策に怯えているんだ？」

「アハハハハ……………」

七乃は冷や汗をかきながら笑う。

「（実は、美羽様が夜中にこっそりと蜂蜜水を飲んでいるので『蜂蜜水を飲んでいると、雪蓮様に叱られますよ』と注意したんです。それでも止めなかったので剣を構えた雪蓮様の人形を倉へ通じる道に置いたら……………）」

「（夜中に孫策が剣を構えながら急に出たらそれは恐いだろ……）」

「（まあその時に本物の蜂蜜水が出たんですけどね）」

「（それは言ったらあかんだろ……）」

「（それ以来、夜中に蜂蜜水を飲むのは無くなったんですが……）」

「（逆に孫策が苦手になってしまった……か）」

……まだ孫策が気づいてないだけマシか……。

「もう、どうしたのよ美羽。この前は普通に私に抱き着いてきたりしたのに〜」

ぶうと孫策が頬を膨らます。

「き、気のせいなのじゃ……」

美羽がかなり震えている。

……そんなに怖かったのか？

「気のせいじゃないわよ。えいッ！……」

孫策が後ろから美羽に抱き着いた。

「ピヤアッ！……」

美羽がかなり震えたと思うと……………。

『あ』

「……………うう……………」

美羽の顔はかなり真っ赤である。

「その……………ゴメンね美羽……………」

孫策が美羽に謝る。

「……………構わないのじゃ。元は妾が悪いのじゃ」

孫策達には既に理由を言っている。

「それじゃあそろそろ進軍するか。遅れると何か言われそつだ」

「それもそつですな夏蓮様」

夏蓮の言葉に美羽が頷く。

「零。急いで出立の準備じゃ」

「分かりました」

零が頷く。

「俺も手伝うか」

そして、袁術軍は孫堅軍と合流して定められた集合場所に向かった。

第十九話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第二十話（前書き）

夏侯惇のキャラ改変が激しい……。

第二十話

「報告ッ！！ここから五里先に曹、劉、董の旗と各陣営を確認しましたッ！！」

孫堅軍と合同で進軍していると、斥候として放っていた兵士が報告してきた。

「地図で確認すると、十二里先に廢城があつてそこに黄巾軍の主力部隊がいるみたいです」

七乃が地図を見ながら言う。

「ならば、三軍と合流するかの」

美羽はそう決断した。

袁術軍陣営

「董卓軍が諸将は董卓軍陣営にて集合せよ、軍儀を行つと使者が申しています」

三軍に合流して陣営を設営中に使者が来た。

「断る理由は無いのう。七乃、零、長門は妾と董卓軍陣営へ行くのじゃ」

「分かりました」

「うむ」

「……………分かりました」

俺は少し間を置いて了承した。

……………百パー、曹操いるよな？

「どうかしたのか長門？」

「いやあ……………何でもないよ何でも……………」

零に言われるが俺は何でもないと答える。

……………何も起こらない事を祈るか……………。

董卓軍陣営

「失礼するのじゃ」

途中で再び合流した孫堅達と案内された天幕に入った。（孫堅軍の代表は孫堅、孫策、周瑜の三人）

「「ッ!?!」」

うわぁ……曹操いたし、目が合ってしまった……。

まぁ直ぐに逸らしたけどな。

「お、長門やんかッ!?!」

董卓軍の代表は霞だった。

霞は俺を見ると直ぐに抱き着いてきた。

「久しぶりやな長門」

「そつやな霞。桜花は?」

「桜花は今回は留守番や。新兵の訓練しなあかんからな」

「そつか……。ま、元気ならそれで充分やけどな」

「……そろそろ始めないかしら?」

曹操が言う。

「それもそつやな。ウチが黄巾軍討伐軍の將軍張遼や。何進の代理やけど、作戦とかは皆で考えてな。ウチは戦闘するしか取り柄が無
いからな」

「あら、中々視野が広いようね？」

「まあ事実やからね。何か作戦はある？」

「黄巾軍が占領している廃城の地図は有りますか？」

周瑜が霞に聞く。

「あるで。斥候を放って廃城の周りの地理を調べたわ」

霞が地図を出す。

……廃城の裏は森か……。

「……その貴方。貴方は何か意見でもあるかしら？」

「ん？」

急に曹操が俺に聞いてきた。

「何故自分ですか？」

「あら悪いかしら？」

「……分かりました。自分が思うに、廃城の後方にある森を利用すべきでしょう」

俺は地図の森を指差す。

「その根拠は？」

「我が連合軍の兵力は八万六千。対して黄巾軍は十万二千。我々は数が足りないから奇襲で黄巾軍と戦うしない。んで、連合軍は一万を森へ配備して残りは廃城の正面へ布陣する。そして夜中に森からの部隊が廃城の食料庫を火矢で焼き、その混乱中に一万が廃城へ突撃して乱戦にさせる。更に城門を開いて、待機していた七万六千の部隊も廃城に突撃して黄巾軍を一網打尽。どうですか？」

「……中々の案ね。他には？」

曹操が皆に聞く。

「その一万の部隊は誰が出すんだ？」

ここで劉備と共に義勇軍を率いている北郷一刀が口を開いた。
（てかいたんだ……）

「なら妾が出すのじゃ」

美羽が言う。

「私の部隊からも出すわ」

「私からも出そう」

曹操と孫堅も頷いた。

「んじゃあ王双の案でやるわ。これで解散や」

霞の言葉と共に軍儀は終了した。

自分の天幕

「……よし」

あれから自分の天幕に戻り、出撃の準備をしていた。

俺も一万の奇襲部隊に行くからな。

「隊長。曹操殿が隊長に面会したいと言っています」

「曹操が？」

凧が天幕に入ってきた。

てか来ないでほしいよ曹操。

「……会わないとあかな……」

俺は溜め息を吐いて天幕を出た。

陣営前

陣営前に曹操と夏侯惇、夏侯淵がいた。

「久しぶりね曹徳……今は王双かしら？」

「あの……曹徳とは誰ですか？」

「……何、嘘を言っているのかしら？」

「いや自分は王双なんですが……」

はぐらかす。もうはぐらかすしか無いよ。

「ええいッ！！何故、華琳様に何を嘘をつくんだ曹徳ッ！！」

夏侯惇がキレた。

「だから自分は曹徳とやらではありませんよ」

「では曹徳では無いという証拠があるのかしら？」

「ほう。どんな証拠ですか？」

曹操が俺の右肩を指差す。

「曹徳の後ろの右肩には傷が付いているはずよ。私との試合で曹徳は右肩を負傷したからね」

……確かに右肩に傷があるな。

てかあれは試合だったのか？

曹操は武器持ちで俺は木刀だったはずなんだが……。

「まあいいでしょう。見たければどうぞ」

俺は上の衣服を脱いで後ろを振り向いた。

「……ッ!?」「」

「どうですか？背中や肩は傷があるので曹操殿が申した傷はどれですか？」

背中などには山賊や盗賊などの戦いで何箇所か傷を負ったりしていた。

曹操が指摘した右肩の傷はあるけど、曹操自身もどれが自分が負わせた傷か分からないからな。

「……どうやら私の勘違いだったようね」

「でしょっ?」

「話は代えるわ。王双、私のところに来ないかしら?」

「お断りします。自分は袁術軍がいいので」

「……そう、邪魔したわね。行くわよ春蘭、秋蘭」

「……はッ!……!」「」

三人が歩きだす。

「……………（ニコリ）」

すると、夏侯惇が振り返って俺に微笑んだ。

「……………」

……………夏侯惇は完璧に俺だと気づかれてるな。（てか、さっきの言動は芝居か？）

「まさか、まだあの約束を覚えていたんだろうか……………」

俺はそう呟きながら陣営に戻ろうとする。

「あ、王双さんッ!!」

「あん？」

今度は劉備、北郷、関羽、張飛、諸葛が現れた。

……………何やねん今度は……………。

思わず関西弁が出たが気にするな。

「何ですか？」

「王双、何でその鎧を袁術軍が使用しているんだ？」

北郷が俺に聞いてきた。

鎧？ああ戦国時代の鎧を使用しているからか。

「よく分らんが我々がこの鎧を使用したらあかんというのか？」

「い、いやそうじゃないんだ。ただ気になったから………」

「なら別に構わないでしょう」

「なッ！？御主人様に対して何という聞き方だッ！！」

関羽が怒る。

「ただ普通に返答しただけでしょう。では準備があるので失礼します」

俺は劉備達に頭を下げて天幕に戻った。

第二十話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m () m

第二十一話（前書き）

夏侯惇のキャラ改変が激しい……。

昨日、日本橋に行って思わず借金姉妹2 AFTER STORYを買ったのは後悔してない……。

第二十一話

「……やはり王双は曹徳ね」

「は……」

曹操は自軍に戻る最中、ポツリと呟き夏侯淵が頷く。

「軍儀で私を見つけた時は驚いてたけど直ぐに目を逸らしたわ。それに曹徳が何か嘘をつく時は何時も頭をかいていたわ」

「……よく見ているですね」

「私は曹徳の姉よ？姉は義弟の事を何時も見ているのよ」

曹操が笑う。

「ですが……曹徳様に真名は……」

「ええ。母上が嫌って付けてはいなかったわ。恐らく曹徳は自分で付けたのよ。曹家との絶縁の意味でね……」

「……」

曹操の言葉に夏侯淵は何も言わなかった。

まあ、実際は真名が無かったから自分で前世の名前を付けただけなのだが……。

「でも……戦略はまだただけど、武は強くなっているわ。まあまだ私達には敵わないけど」

「曹徳など私の大剣で地に伏せさせてみますよ華琳様ッ!!」

夏侯惇が意気込む。

「あら、頼りにしているわ春蘭。さて、私達も準備をしましょ」

歩いて話しをしているうちにいつの間にか自軍の陣営に到着していた。

「はッ!!」

夏侯姉妹は曹操に元気良く返事をした。

夏侯惇 SIDE

「ふう……」

私は天幕に設置されている椅子に座る。

「……やはり曹徳殿は生きておられたか……」

思わず安堵してしまう。

「おっと、曹徳にはキツイ目で見ないと。何せ、曹徳殿からの命令だからな……」

『曹操を何が何でも守れ。俺の事は気にするな』

私が幼少時に曹徳殿とお会いした時に言われた言葉。

最初は分からなかった。

だが、曹徳殿が華琳様より劣るのを知った時、分かってしまった。

『曹徳殿は始めからこうなるのを分かっていたのではないか？』

……曹徳殿、私は華琳様を必ず守ります。

だから……貴方は貴方の道を歩んで下さい。

夏侯惇は天幕の外に出て青空を見た。

森の中

「ブエックシュンッ!!」

俺は盛大に噓をした。

「……五月蠅い。気付かれる」

「分かったから怒るな孫権」

誰か噂をしているのか？

……多分夏侯惇だな。

俺の言葉を勝手に美化してるんだろう。

ああそうそう。

俺は奇襲部隊の司令官として、廢城の後方にある森の中に潜んでいた。

袁術軍からは五千、孫堅軍は二千五百、曹操軍も二千五百だ。

袁術軍からは俺、凧、クロエ。

孫堅軍からは孫権、甘寧、周泰。

曹操軍からは夏侯淵が来ていた。

孫権が参加しているのは戦に馴らすためらしい。（孫堅が言っていた）

「とりあえず、もうすぐ夜だからこのまま待つしかないな」

呆れた事に黄巾軍は後方の森を全く警戒していなかった。
やっぱり烏合の衆だよな。

夜中

「偵察によれば、食料庫はこの倉です」

偵察に出ていた周泰が俺に言う。

「よし、周泰。周りに魚油は撒いたか？」

「はい」

周泰が頷く。

「なら王双。早く攻撃を」

「慌てるな孫権。夏侯淵、火矢の用意は？」

「準備は完了している」

俺の言葉に夏侯淵は頷く。

「弓隊、構え」

俺の言葉に火矢を持った弓隊が構えた。

「放てッ!!!」

弓隊が一斉に火矢を食料庫などに放ち、食料庫は瞬く間に燃えていく。

「か、火事だアッ!!!」

「火を消せッ!!!」

眠っていた黄巾軍兵士達が慌てて消火活動をしようとする。

「全隊抜刀」

俺の言葉に兵士達が剣を抜く。

「弓隊は援護射撃に徹しろ。残りは斬り込むぞ」

俺は刀を抜いて、廃城に刀身を向けた。

「目標、廃城にいる黄巾軍ッ!!!一兵残らず叩き斬れッ!!!全軍突撃イイイイッ!!!」

『ウワアアアアアアッ!!!』

兵士達は雄叫びをあげて廃城に突撃を開始した。

董卓軍（張遼）

「張遼將軍ツ！！廃城から火の手が上がりましたッ！！」

「作戦が始まったな。全軍に通達や突撃準備ッ！！」

「はッ！！」

袁術軍

「お嬢様。廃城から火の手が上がりましたよ」

「おお、長門がやってくれたかの。突撃準備じゃ」

「はい」

美羽の命令に七乃が頷く。

曹操軍

「華琳様、廃城から火の手が上がりました」

「そう。門が開いたら突撃よ」

「は
」

曹操の言葉に夏侯惇が頷く。

「……曹徳。貴方の戦い、見せてもらおうわ」

曹操は炎をあげる廢城を見て呟いた。

第二十一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております
m () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2622z/>

曹徳の奮闘記

2012年1月4日09時53分発行